

放送人の会

No.92

2021.9.10

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階 ☎&fax03-3221-0019 Mail info@hosojin.jp

発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉

編集担当 伊藤雅浩(編集長)、菅野高至(広報委員長)、鈴木典之、逸見京子、

戦後76年ということ

放送人の会会長 今野勉

伝える立場 受け取る立場

このところ、夏は北海道で過ごすことが多い。ここの夏も北海道にいた。8月のマスコミは、戦争特集が恒例だ。地元紙・北海道新聞も「人生100年時代 戦争を語り継ぐ」というシリーズを連載していた。そのうちの1回が、私と同じ夕張の炭鉱で戦時中、代用教員をしていた女性の話だった。

戦後76年という意味

その女性は、旧制の地元高等女学校を卒業してすぐに地元の国民学校の代用教員になった。男性教員が戦地へ召集され、その穴埋めにまだ16歳の女性が駆り出されたのだ。

生徒の中には、朝鮮半島から来た子供たちがいた。彼女自身は朝鮮の子供たちを分けへだてなく扱ったが、教員の中には、朝鮮の子供たちを殴ったり蹴ったり、水の入ったバケツを持たせて長時間立たせたりする者もいた。

16歳の彼女は、助けてやりたかったが、見て見ぬふりをして何も出来なかった。

今になって、彼女はそこを悔いていた。彼女は、今、何歳なのだろうと思つて紙面を見直すと、93歳とあった。終戦の時、17歳だった人が今年93になっている。

戦後76年なんて中途半端な年だと思つていたが、戦時中に戦争を体験した者は、もう数少ないのだということに改めて愕然とした。

私たちは、戦争というものを、いかにひどい目にあったか、という視点で捉えてきた。大方の証言や記事やドキュメンタリーもそうであった。しかし、この女性のように、戦時中に自分たちがどんなにひどいことをしたのか、という証言は、はるかにすくない。そして、そうした加害者としての証言者が、もはやいなくなっているのかも、と思うと、私たちの歴史の大きな部分が欠落したままになるのかもしれないと、暗然とした。

加害者としての証言

戦争体験者の、加害者としての証言は、このところようやく目につくようになってきた、と感じていたことではあった。たとえば今年2月刊行の「中国戦線 ある日本人兵士の日記 侵略と加害の日常」という本である。中国農民からの家畜や農作物の強奪、中国の兵士の殺害などが、罪意識もなく記されている。「できれば人を殺したくなかった」と本人は家族に述べたというのがせめてもの慰めである。

「証言 我ら斯く戦へり」も今年8月刊行された証言集だが、そこにも、日本軍兵士による中国軍兵士の虐殺が記されている。ただし、証言は、1970年代に聞き取りされ、71年に週刊誌に連載されたもので、証言者のほとんどはこの世を去ったと思われる。

この8月の新聞の読者の投稿欄に「被害と加害・語り続けた近藤さん」という投稿が載った。「自らの被害と加害体験を語り続けた元日本兵、近藤一さんが5月に101歳で死去されたという(中略)加害体験を語ることにしたのは戦友会から批判もあつたと聞くが(中略)兵士としての加害と被害を語り続けられた稀有の存在だった近藤さんのご冥福をお祈りしたい」(朝日・8月7日)

8月31日には、同じ朝日新聞に「満蒙開拓平和祈念館館長の寺沢秀文さんへのインタビュー記事が載った。見出しに「加害の歴史直視 たたかれた痛み 想像する力が必要」とあつた。「加害と被害は入れ替わる。『自分がたたかれた側だった』と、相手の立場で歴史をとらえる創造力が必要なのです」

長い間、自分たちのなした加害の歴史を語ることは「自虐史」と呼ばれてきた。今、加害を語ることで自ら傷みを引き受け、矜持を保つ人が現れ、それを伝えることで、人間の尊厳を見出そうとする人々も現れてきている。

こうした人々の証言を伝えるメディアとしてラジオやテレビの果たしうる機能は、文字より遙かに大きいはずである。惜しむらくは、ラジオやテレビは、被害の歴史を掘り起こすことに時間を費やしてはきたが、加害の歴史に踏み込むことはそれほど多くなかった。

今、目覚めても、証言できる人は、もういない。戦後76年ということ、それを容赦なく私たちに想起させる年になった、と、個人には思われてならない。

放送人グランプリ 2021(第 20 回) 贈賞式

2021 年 7 月 31 日 15 時～ 千代田放送会館



代田一貴氏 讃岐好伸氏 松本裕子氏 佐藤謙治氏 東野真氏
田淵俊彦氏 大根仁氏 川上剛氏 塩田純氏 宮部選氏 八木康夫、
新井順氏 石橋冠氏 今野勉氏 金本麻理子氏 市村元氏 板垣淑子

放送人グランプリ2021

◆グランプリ大賞◆

金本 麻理子

◆グランプリ優秀賞◆

南海放送

ラジオ特別報道番組

「感染―正義とは何か―」

◆グランプリ優秀賞◆

テレビ東京

「人生最高の贈りもの」

◆グランプリ優秀賞◆

NHK名古屋

「ワタシたちはガイジンじゃない!」

◆グランプリ特別賞◆

市村 元

◆グランプリ特別賞◆

NHK東日本大震災プロジェクト

〈第7回大山勝美賞〉

新井順子 プロデューサー TBSスパークル

大根 仁 演出家 オフィスクレッシェンド

放送人グランプリ2021の贈賞式は、東京が非常事態宣言下のため、感染対策に配慮し出席者を贈賞委員と受賞者の皆さんに限った開催となりました。例年プレゼンターをなさっている渡辺美佐子氏にも遠慮いただきました。式の司会進行は贈賞委員長の渡辺紘史氏。以下は式次第にそつての記録です。なお、本当の表彰状には、句読点は付いておりませんが、会報では読みやすくするため、句読点を付加しました。

贈賞式にあたって

今野 勉 会長



受賞の皆さん、今日はおめでとございませう。もう、入つてお気づきでしょうが、異例の形の贈賞式になりました。会場にいるのは受賞者の皆さんと贈賞委員の皆さんと放送人の会の理事だけです。例年ですと、ここに会員が一杯になっていて、終わると下のカフェを借り切つて、皆さんと会員が言葉を交わす、現役の皆さんとこちら側の放送人としては先輩に当たる方々と、放送に対する熱い思いを、お酒を飲んでお話しすると盛り上がるんですが、それが出来ないということで非常に残念に思っています。出来るかどうか確約は出来ませんが、改めて場を設けて皆さんと親しく会員がお話しをする機会を作りたいとは思っています。その時には、宜しくお願ひします。

放送人グランプリは他の賞と違つのは、放送人ひとりひとりが一番推したいと思う番組を選んで、それをお互いで議論して賞を決めるので、思いが非常に強いものですから、何故選んだか贈賞の理由を語るのが、異常に長いんです。こんなに長く一人ずつ喋つたら大丈夫なのかと思うくらいの講評をするんです。良い番組を作つたことへの評価もあります。が、仲間として先輩として苦労が分かるわけです。そのことを全部語り尽くそうとするものですから、より長くなるんです。そういう長い講評も、(コロナの) 言う時期ですから長くならないように、多少は自覚してくれというお触れがでています。守れるかどうかはわかりません。(微笑)

私としては、必ず改めて場を設けて親しくお話しをしたいと思つています。そう言うわけで、少し残念ではありますが、私どもの熱い思いを受けていただいて、これからも宜しくと言うことで、ご挨拶にしたい。皆さん、おめでとございませう。(拍手)

大山勝美賞 選考経過

八木康夫 大山勝美賞・選考委員長

今年7回目になる大山勝美賞の設立のいきさつは、この会の創立時のメンバーで、2代目会長を務められ、ドラマの創生期に優れた



ドラマを作つた大山先輩を顕彰し、その意思を継ぐために、ドラマの若いクリエイターを個人で表彰します。選考委員は鶴橋康夫さん、そちらに座つていらつしやる石橋冠さん、テレビ朝日の五十嵐文郎さん、日本で一番テレビドラマを見ているという鈴木嘉一さん、そして渡辺さんと僕との6人です。

何名かの候補者があり喧々諤々の末に、プロデューサーとしてTBSスパークルの新井順子さん、ディレクターとして大根仁さんに決定されました。去年の活躍から考えれば順当だと思ひます。おめでとございませう。(拍手)

大山勝美賞表彰

会長より、表彰状、トロフィー、盾、ささやかな賞金が贈られました。



新井 順子 氏

《表彰状》 あなたは2013年『夜行観覧車』以来、『Nのために』『アンナチュラル』『わたし、定時で帰ります。』など話題作を次々と制作、2018年に制作した『Aではない君と』では東京ドラマアウォード・グランプリを受賞しました。とりわけ昨年制作の『MIU404』は評価が高く、エンターテインメント性は言

うまでもなく、ブラック企業、外国人技能実習生、疎外された若者など、様々な社会問題を巧みにストーリーに取り入れ、見るものに問題提起をしています。真摯な仕事ぶりで原作者・脚本家からの信頼も厚いあなたの今後の更なる活躍を期待して、ここに大山勝美賞を贈ります。

【講評】八木康夫氏

僕は彼女がAD時代からずっと長い付き合いです。若い頃から、ドラマをやりたいという熱意があつて、大学に行く時間があつたらドラマの勉強をしたいと、専門学校に行かれて現場に入つてきたんです。

僕も辛い仕事をお願いしました。女性だし、体力も無いし、そんな中で地道に力を付けて来て、30台前半でゴールデンタイムのチーフプロデューサーをやる。2013年の『夜行観覧車』です。当時ドリマックスという制作会社において、局Pでは無かつたんです。視聴率も良く、高い評価も得て、それから次から次へと作品を作つて、2018年の『アンナチュラル』。昨年の『MIU404』では放送文化基金賞など各賞を総なめするなど、今や誰もが認めるプロデューサーに成長されました。本当に嬉しいです。

彼女は、この4月1クール『着飾る恋には理由があつて』やつて、秋10月にも1クール『最愛』を作ると言う事ですが、局というのは自分自身の都合で次から次へと作らせるから、『消費しちゃう』という悪い癖があります。ですから、老婆心ながら自分のやりたいものを作つてほしい、勿論、そう言うわけにはいかないかも知れませんが、長い未来がありま、良いドラマを作つて下さい。今日は本当におめでとございませう。(拍手)

【受賞者の言葉】 新井 順子 氏



TBSスパークルの新井です。本日は素晴らしい賞がありありがとうございます。

私は両親が共働きの鍵っ子で、だからテレビをすぐ見るようになりました。中学の頃から「東京へ行ってドラマを作ってやる!」という想いだけがあり、その勢いだけでこの世界に入ってきて、八木さんの番組で助監督をやらせて貰いました。その頃は、みんなに「本当に使えないなっ!」って思われていたんじゃないかと思うんです(笑)。

TBSの現場が多いんですが、そこで色々な俳優さんや監督さん、作家さんとも知り合っただけで、その出会いが今の自分を成長させているんだと思います。本当にラッキーな積み重ねで番組をやらしていただきました。『夜行観覧車』の時も、プロデューサーの実績がほぼ無い私に鈴木京香さんが「出ます!」と仰ってくれたり、何の経験もない私にチャンスを与えて下さった方々がいたからこそ、今ここに立てているのかなと思います。

その感謝を忘れず、今後も「消費すること無く、新たな作品を作り挑んでいきたい」と思います。本日はありがとうございます。(拍手)

大根 仁氏

〈表彰状〉 あなたはテレビ東京を中心にして、「まほろ駅前番外地」などの深夜ドラマを手がけてきました。脚本・演出を兼ねることも多く、2010年には「モテキ」をヒットさせてこの映画化で監督デビューも果たしました。都会的な映像感覚とともにギャグのセンスも併せ持ち、若い世代に強く支持されています。2019年のNHK大河ドラマ「いだてん」では外部から初めて演出陣に招かれ、翌20年には異色のラブコメディ、テレビ東京の「共演NG」が話題を集めました。

あなたの優れた才能と実績を称え、ここに放送人グランプリ・大山勝美賞を贈ります。

【講評】 鈴木 嘉一氏 (委員)



今野会長が冒頭、この会の推薦者の言葉が長いとおっしゃいました。今読み上げた賞状がこれ又長く字もすく小さい。恐らくこんなに長く、小さい字の賞状はほかに無いと思います。だいたい私の推薦理由はそこに尽きています。同じことを喋らないように言われているので、違うことを話します。

大根さんの名前を初めて見かけたのは、今から13年前の2008年、テレビ東京の深夜ドラマ『週刊真木よう子』です。真木さんがブレイクする前、毎回違う監督と脚本で、

共演者もその都度変わって13回分の30分ドラマを作るという企画でした。大根さんは真木よう子と田中哲司が共演した1回目の脚本・演出を担ったのははじめとして、13本のうち5〜6本撮りました。しかも、企画自体にも関わっていたようです。スタッフは今から思うとすごい顔ぶれなんです。脚本では三浦大輔さん、監督では山下敦弘さんら映画・演劇界の気鋭が揃い、すごく尖った内容でした。大根さんはその後、瑛太と松田龍平が共演した『まほろ駅前番外地』や、オダギリジョー主演の『リバーエッジ 大川端探偵社』、TBSの『ハロー張りネズミ』を手がけ、いずれも脚本と演出を兼ねました。こうした一連の作品は、僕らの世代だと、市川森一さんが脚本を書き、萩原健一が主演した『傷だらけの天使』を連想しますね。大根さんがこれをどの程度意識したかどうかは分かりませんが、何かそういうエッジの効いた作品を作ったと思うんです。一昨年のNHK大河ドラマ『いだてん』東京オリムピック噺」では、海外ロケでアムステルダム五輪の一番重要などころを外部演出家として撮ったように、さらに世界を広げたという印象を受けました。そして、昨年の『共演NG』では、深夜ドラマから一步出て、大人のラブコメディであり、近松門左衛門の虚実皮膜論を思い起こさせるユニークな作品をつくりました。本当に脂がのりきったという感じがして、丁度この賞にふさわしい頃かなと思います。(拍手)

【受賞者の言葉】 大根 仁 氏

大根でございます。本当に身に余る、分不相応な賞をいただきまして、本当に嬉しいです。僕はテレビだけでなく、映画とかCMとかミュージックビデオとか映像という名前がっ

くなら何でも大好きで節操なくやって来たんですが、何に一番影響を受けて何に育てて貰ったかと言えばテレビなんです。僕は昭和43年、1968年生まれなので、小学校から高校まで一番多感で影響を受けやすい時期に見ていたテレビドラマや番組が、今の自分の血肉になっっているような気がします。



さっき仰っていたいた『傷だらけの天使』は勿論のこと、大山勝美さんが山田太一先生と組まれた『ぶろいりの林檎たち』を始めとする数々の名作。市川森一さんの『淋しいのはお前だけじゃない』はDVD BOXを持っていて、今でも年に一回は見返すドラマです。他にも沢山あるんですが、今日まさかお会いできるとは思っていなかった石橋冠さんの『池中玄太80キロ』は本当に影響を受けてまして、あの半地下の喫茶店はどうやって思いついたのかお伺いしたいなと思ってるんです。

あと、八木さんが作られた『青が散る』という1983年放送の2クルールの予定が、視聴率が取れずに1クールで打ち切りになったドラマがあつたんですけれど、これは僕に非常に大きな自信を与えてくれたドラマでした。あの「下手でもいいんだ!」っていう芝居が下手でも、スタッフワークが下手で

も、「思いさえあればいいんだー」ということをあのドラマに教えて貰ったような気がします。

本当に諸先輩の数々のドラマに影響を受けて育てられました。なので、映画をやritつも僕はテレビが大好きで、これからもテレビドラマを作り続けたいと思っています。テレビ局員でもなく、深夜ドラマとかマイナーな数字を取らない番組ばかり作ってきたこんな自分に、このような賞をいただけたと本当に嬉しいんです。ありがとうございます。(拍手)

放送人グランプリ選考経緯

渡辺 紘史 贈賞委員長



先ほどの会長の挨拶にもありましたが、選奨は、前年度の番組を対象に、会員たちが投票をして、それを元に贈賞委員が合議して決めるという形です。とやって参りました。前年度の番組と言いますと、対象になる番組は2020年度の番組です。ご承知のように、コロナがスタートしたときに、制作をスタートさせた番組がほぼ対象の番組と言っても宜しかろうと思います。

番組というのは、いわゆる制作する側と取

材される側との濃密な接触から生まれると思っております。しかし、コロナ禍で制作が閉ざされてしまった状況の中で、2020年度の番組は制作者たちの素晴らしい工夫と努力で制作を再開しました。そう言う時代に作られた番組が、2020年度の番組であるという念頭に、我々は選考作業を行いました。

当然その中でコロナに関する番組が数多く作られて、なかなかの良作が沢山ありました。しかし、ご承知のようにコロナは今も続いています。ですから、コロナを直接捉えた番組、或いはアフターコロナ、ウィズコロナの後の世の中の有り様を論じた番組など、沢山秀作がありました。が、「まだコロナが続いている以上、そう言う番組を評価するのはどうか？」という意見がありまして、贈賞の対象にはしないとなりました。一点、お断りしておきたいと思っています。

今回受賞された作品は、皆さん、会員の投票が多かったものです。とりわけ金本さんの二つの秀作、BS1スペシャル『レバノンからのSOS』コロナ禍 追いつめられるシリア難民』とNHKスペシャル『世界は私たちを忘れた』追いつめられるシリア難民』には票が集まりました。その一作に賞を贈るということも考えましたが、結局は、その作品一つ一つというよりも、金本さんがこれまで極めて強いメッセージで訴えてきた作品をたくさん作られたという功績に対して、個人賞として大賞を差し上げた方が良いだろうと云うことで、金本さんが大賞に決定しました。

その他、優秀賞、特別賞に関しましては、これは結果論になりますが、結局、三つのポイントで選んだという気がします。一つは、地域性、地域性をいかに的確に捉えてきた

か。二つは、継続性。継続した努力と言ったものでしょうか。三つは、普遍性。普遍性という人間の感情に基づいて作品が作られているかどうか。以上のポイントが結果につながったように思います。

南海放送のラジオドキュメンタリー『感染—正義とは何か—』愛媛県の小さな町のコロナ感染者への差別から、四国のお遍路さんやハンセン病患者への差別へと掘り下げて描いたことが評価されました。NHK名古屋の『ワタシたちはガイジンじゃない!』も、中部工業地帯の名古屋という地域を捉えて、まさにNHK名古屋らしい手法で、ユニークなドラマかドキュメンタリーか分からない魅力的な番組を作り出した工夫と知恵を評価しました。それから、継続性では、永年にわたり地方と地方の文化に貢献してきた「地方の時代映像祭」の事務局プロデューサーを長い間務めてきた『市村 元』さんに特別賞を贈ることになりました。それから、東日本大震災10年になりますが、プロジェクトスタート以来、防災や東北の復興に関して放送やキャンペーンで、NHKだけでなく民放も含めた放送界全体の問題としての確に色々な事業を進めてきた『NHK東日本大震災プロジェクト』に特別賞を贈ることにスナナリ決まりました。そして、翻覆極まりない世の中で、やはり変わらないのは親子とか夫婦とか家族に対する愛情だと思います。そうした普遍性ある人間の感情を素直に真正面に描いたテレビ東京のドラマ作品『人生最高の贈りもの』は、昨年度のテレビドラマが制作中断などあつて難儀しましたが、その中であつてひときわ輝いていた作品でした。

以上、我々としては極めて妥当な結果になったと考えています。簡単ではありますが、これで報告にかえます。宜しくお願いします。

す。(拍手)

放送人グランプリ2021表彰

グランプリ 特別賞

NHK東日本大震災プロジェクト



＜表彰状＞ 震災直後に組織横断的プロジェクトとして発足した「NHK東日本大震災プロジェクト」は放送・放送外を問わず、幅広い視野で震災に向き合い、被災地の復興支援を目指して10年に渡り活動してきました。被災地を忘れないための放送、被災地に笑顔を届けるイベント、全国の人々と被災地をつなげるキャンペーン、世界に震災後の日本を伝える、さらには震災を記録し将来の防災を考える企画など、その多面的な活動に敬意を表しここに放送人グランプリ 特別賞を贈ります。(拍手)

【講評】 菅野 高至 氏（委員）

おめでとございませう。手短かに済ませますのでメモを書いてきました。グランプリ特別賞受賞、おめでとございませう。

私にとつては、この10年の間、日曜朝10時過ぎの『明日へつなげよう』は被災者に思いをはせる素敵な時間を送り届けてくれる番組でした。10時前のうっとうしい政治討論会の空虚な言葉が飛び交う時間に比べ、それはそれは素敵な時間でした。被災地と被災者に寄り添う10年間のプロジェクトの皆さんの豊かな活動は、これぞ公共放送というものでした。時に公共放送が浸食されて揺れている今、プロジェクトの番組や事業など10年の積み重ねは、公共放送NHKの真価を示すものだと思ひます。



昨日、今日の贈賞式を前に、プロジェクトの番組を何か見てみたいと考えて、Googleの検索やNHKアーカイブスやオンデマンドを検索しましたが、中々、ヒットしませんでした。肖像権とかの問題もあるかも知れませんが、再放送だけでなく、いつでも見られるように出来無いものでしょうか。素敵な沢山の番組が埋もれてしまつてはあまりに勿体ないなと思ひつゝです。

ともあれ、2本の番組が検索で出て来ました。今年の3月7日放送の「こころフオトス

ペシャル『いつも胸にあなただけ10年目の手紙』、改めて再見して、そこで描かれた被災者や支援者たちの「人間のしなやかさと優しさに胸打たれました。取材者の皆さんが優しく寄り添って、一つ一つの思いを丁寧にすくい取っていることに感動して、泣きながら見てしまいました。もう一つ『NHK災害アーカイブス』証言『ドキュメント』「被災地の証言」が検索で出て来ました。これは、一人5分から10数分のドキュメンタリーで、写真と文章だけのもの、それに動画がついたものに分かれています。

全国で現在、1、140人の証言があります。証言を取るスタッフの丁寧な仕事ぶりが伺えます。証言の一つ一つが小さく輝く人間ドキュメントで、被災者や支援者の人生そのものです。膨大な証言は、後世に語り継がれるべき震災の貴重な記憶であり、かけがえない記録でもあります。プロジェクトの皆さん、ありがとうございました。（拍手）

【受賞者の言葉】 小原 美和 氏

元 NHK東日本大震災プロジェクト事務局

現 NHK金沢放送局長 制作統括



この度は本当に荣誉ある賞をありがとうございました。

ございました。コロナ禍で、この表彰式を開催して下さった放送人グランプリ事務局の皆さんに心から感謝申し上げます。私自身も参加できるかどうか、直前まで迷ったんですけども、何より諸先輩の熱いメッセージが日々メールで届いたり、お手紙でいただいたりして、本日は何とか出席したいと思つて金沢から参りました。

私は、震災プロジェクトの制作統括ということではしがりを務めさせていただきましたけれども、この賞は、プロジェクトを10前に立ち上げた諸先輩の皆さまの思いや、その思いを10年間に渡って引き継いで下さった同僚や制作プロダクションの皆さん、フリースの皆さん、そしてイベントを開催して下さった数多くの方々のご尽力に対して与えていただいた賞だと思つています。そして何より、10年間、私たちの取材を受け止めて下さつて、声を寄せて下さった被災地の皆さんひとりひとりと与えていただいたものだと感じています。出来ればその方々にもお礼を言いたい気持ちで一杯です。

今年NHKの中で、東日本大震災10年の経験を踏まえて、今後の災害報道を考えるリーダー研修があつたんですが、その中で、「被災者と取材者の心を考える」というカリキュラムを担当しました。最も参加者から上がったのは、自分たちの取材が本当に被災された皆さんにとって、何か役に立ったんだろうかという自問自答の声でした。今でも、数多くの仲間たちが実は大きな痛みを抱えて、葛藤を抱えて、中にはあまりに過酷な経験をjして現場を離れなければならなかったという取材者もいます。そのひとりひとりの思いを、今後の災害報道にどう繋げていくかというjことを改めて考えているところです。

日々被災地は復興に向けて動いていますけれども、「あの日と時が止まったまま全く変わらない」と言う声もいたっていますし、その一方で、「あの日のことを忘れて前に進んで行きたい」という声もいただいています。その両方を受け止めながら、これからも災害報道に取り組んでいきたいと思つています。本当に素晴らしい賞をありがとうございました。

チーフ・プロデューサー

讃岐 好伸 氏



東日本大震災プロジェクト、讃岐と申します。このプロジェクトは10年続いたんですが、そのうちの8年やつてます。協会人生30年近くになりますが、そのうちの8年やつてますんで、相当な感じになるかと思ひます。そしてこの8年、被災した地域と人々のためになることなら番組に限らず何でもかんでもやつて来ました。公共メディアが向き合うべきことを、私自身好きなようにやつて来たつもりです。それが色んな形で評価をいただいたことは非常に有難いことだと思つています。

災害の激甚化で、各地で被災する方がたくさん出ておられます。ですが、東日本大震災で

被災された方々もまだまだ復興途上でありま
す。放送や放送局も含めて、そうした人々を応
援する役割があります。NHKとしても、まだ
やらなきゃいけないと思っていますので、私
ちよつと力が足りないかも知れませんが、こ
れからもやっていきたいと思っています。皆
様におかれましても東日本大震災のことを忘
れずに気にかけていただけること切に願いま
す。放送人の会のみなさま、ご指導のほど宜し
くお願いします。(拍手)

元エグゼクティブ・プロデューサー

現 フリー・プロデューサー
佐藤 謙治 氏



『証言記録 東日本大震災』という番組を
震災の翌年から10年に渡って続けて参りま
した。被災者と支援する方々を中心に、その声
を聞く43分のドキュメンタリー番組を97本
放送して参りました。今ですね、復興五輪とい
う掛け声が始まったオリンピックが強行され
ていますけれども、被災者、特に福島の方々か
らは「10年たつても復興したとはとても思え
ない、自分たちはこの国から見捨てられたの
ではないか」という声をよく聞くことがあり
ます。

一方で放送は、被災者とともに歩み支えて
行く「絆」という言葉を、大変多く使って連呼

して電波で消費してきました。しかし、「絆」
という言葉を考えてみると、そういう10年
という時代で一区切り出来る賞味期限のある
言葉では無いと思いますし、本当にやつぱり
必要なのは今も苦しみ続けている被災者と、
そして震災で明らかになった積み残された問
題、沢山ありますけれども、それを継続して掘
り起こして行くことに尽きるのではないかと
思います。その意味で、ドキュメンタリーとい
うものが記録をし続けることに拘ると言うこ
とを今一度、胸に刻んで受賞の言葉に代えさ
せていただきます。

ありがとうございます。(拍手)

(株) パオ・ネットワーク 代表取締役社長
松本 裕子 氏



この度は、放送人グランプリ2021の特
別賞受賞にあたり、「東日本大震災プロジエク
ト」の番組制作に携わった制作スタッフを代
表して贈賞式に出席させていただきました。

この10年、「東北発☆未来塾」、「証言記録」、
「サンドウィッチマンの東北酒場で逢いまし
よう」など、震災に関連する多くの番組を制作
しました。私たちが東北と関わることになっ
た最初の番組は、震災の翌年3月11日にスタ
ートした「東北発☆未来塾」です。東北、ひい
ては未来を担う若者たちを塾生とし、復興に
必要なノウハウを各分野のプロフェッシヨナ

ルである講師が実践的に伝えるというもの。
9年余りで、講師は84人、輩出した塾生は5
00人以上に上ります。出演後、学んだことを
活かす仕事に就いた塾生たちがいます。番組
が、少しでも道しるべになってくれていたな
ら嬉しい限りです。

忘れられない言葉があります。2021年
2月、「東北酒場で逢いましょう」最後の収録
日。サンドウィッチマンの伊達さん、富澤さん
の楽屋を訪ね、これまでの御礼を伝えたところ、
「こちらこそ10年も東北の番組を続けて
くれてありがとうございます」という言葉が返ってきま
した。何事にも一区切りがあり、永遠に続けて
いくことはできませんが、とても胸が痛くな
ったことを覚えています。

時が経つに連れ「震災の記憶が風化してい
く」と言われるようになりました。そうならな
いよう、そう言われないよう、静かに粘り強く
続けていくのがテレビの役割だと思います。
そのために、私たち制作者は創意工夫を怠ら
ず、チャレンジし続けたいです。

最後になりますが、私どもの取材にご協力
いただいた東北の方々に、あらためて御礼を
申し上げます。(拍手)



東北酒場で逢いましょう



東北発☆未来塾

グランプリ 特別賞

市村 元 氏

〈表彰状〉 あなたは13年にわたって「地方の
時代」映像祭のプロデューサーを務めてきま
した。1980年に始まったこの映像祭は、放
送局、ケーブルテレビ、市民・大学生、中高生
の4つの部門に分かれ、幅広く日本の映像文
化の発展に寄与してきました。その成果は各
放送局の番組制作者に励みを与えるだけでな
く、映像制作を志す若者に刺激を与え、更に全

国の地方自治体の広報事業にも一役買っています。昨秋40回を迎えてなお、その規模・内容



を發展させているのは、あなたの並々ならぬ熱意と長く放送人として培ってきた能力によるものであり、ここに放送人グランプリ特別賞を贈ります。(拍手)

【講評】鈴木 典之 氏(委員)



市村さんへのオマージュは表彰状の内容で足りていますが、ひと言私見を述べます。市村さんの寡黙で謙虚な社会貢献を想うと、私にはアフガニスタンの人々を『命の水』で救

った日本人医師・中村哲さんの姿がダブリます。中村医師は、戦火で土着の地を荒され難民化する民衆を救うのは、「武器や救助物資ではなく『水』だ」と気付き、現地の人々を説得して井戸掘りから始め、遂には砂漠化した土地に「水路」を開いて田園地帯に変えました。民衆が安住し平和な生計を立てられる国土を出現させたのです。

この『命の水』を日本の「放送文化」の基盤作りに置き換えてみると、市村さんの貢献の大きさ・深さがみえてきます。つまり、市村さんは映像祭という仕掛けの場で、学生層・社会人から放送局まで幅広く放送文化の土壌固めと人材づくりに、『命の水』を注ぎ込んでいる、しかもたった独りでの献身です。作品制作とは次元の異なる、放送振興の「水路」作りです。実際を伺うと、映像祭開催は毎回危うい綱渡りの連続で、彼の情熱と手腕だけが頼り。しかし市村さんの人徳と説得力を支えとする人は、地方局の制作現場を含めて多い、これは私の実感で、いま業界に必要なのは彼のようなリーダーシップです。

コロナ禍の試練を経て、「地方の時代」志向は国の方法論としても一層現実化するでしょう。市村さんの視野の広い志と行動は、当「放送人の会」の活動にとっても大きな刺激と指針になると私は考えています。以上です。

(拍手)



【受賞者の言葉】 市村 元 氏

市村です。荣誉ある賞をいただき、感謝申し上げます。私は、昨年40周年を迎えた「地方の時代」映像祭の三代目のプロデューサーで、前任は私が尊敬する大先輩の村木良彦さんでした。それが2008年の1月、当時、私は福島の小きなテレビ局の役員をしていたんですが、突然社長から電話があつて「村木さんが亡くなった」という知らせがありました。社長は佐藤虔一(けんいち)さん。「七人の刑事」なんかを作っていた方ですが、村木さんの義理の弟です。「葬儀の手配などは私でもやるが、放送業界や関係団体等への連絡をやってくれないか」という電話でした。そこでその日一日、村木さんの広い交友関係をたどりながら、テレビマンユニオンや多くの団体、放送人の会にも連絡したと思います。そういうのを一日中やっていたのを覚えています。その時は、まさか、映像祭の後をやってくれと言われるとは全く思っていないませんでした。

ところがそれから半年以上たって、映像祭の大阪での開催に努力していた人たちから、村木さんの後のプロデューサーをやってくれないかというお話が来しました。私は、当然のことながら、「村木さんのような方の後任は私には無理です」と言ってお断りしました。加えて当時は、地方局の現役の役員、もしプロデューサーを引き受けるならそれを辞めるしかありません。ですので、当然お断りしたのですが、心には引かかるものがありました。まあ良く考えてみると「地方の時代」映像祭のような映像祭をこのまま絶やしてしまう訳にはいかない。地方局の仕事は、現場に近いこともあつてそれなりに面白かったのですが、きつと「地方の時代」映像祭の仕事はさらに現場に近く、自分としてやりがいがある。そして、人々のお役に立てることが出来るかもしれないと思いました。そんなわけで、悩んだ挙句にお引き受けしました。地方局の役員とプロダクションの社長の仕事は、任期途中でしたが、両方とも辞表を出して辞めてしまいました。



それから13年間、大阪に単身で住んで映像祭をやっていますが、本当にもの凄く手応えがあります。「地方の時代」映像祭というのは、その名前の通り、地方と地域のものづくりを支えていく映像祭です。地方や地域からの視点、つまり永田町とか震が関からもものを見るんじゃないくて、生活するそれぞれの現場から社会を見ていこうというスローガン・精神を貫いている映像祭です。それに加えて、もう一つの特徴があります。放送局のものづくり、ドキュメンタリストを賞める賞はいくつもあるんですが、この映像祭には、放送局だけではなく、ケーブルテレビの部門、市民・学生・自治体の部門、高校生の部門があります。幅広く地域の作り手をみんな

誉めて行く。頑張る。貰うための応援をしようじゃないか。そして、秋の大会ではそんなさまざまな作り手が、プロとかアマとかの垣根を越えて、もの作りについて自由に情報交換し話し合おう。そんな映像祭はこれしか無いと思っています。



それでどのくらいの作品が毎年寄せられるかというと、毎年大体270から300作品にのぼります。これらの作品を全部見るというのはなかなか大変ではありません。私の場合は、2か月ほどの間、ほぼ引きこもりでモニターに向かっています。確かにその作業は大変です。目も悪くなります。しかし、大変以上に、とっても力強く思います。というのは、それらの作品を見ると、地方のもの作り、地方のテレビ局、ドキュメンタリーは全滅捨てたものじゃない、まだまだ凄く元気。パワーがあると思うのです。地方にはまだまだたくさんのお待ちはなく活力に満ちた野武士たちです。今、テレビが危ないとか、若い人はテレビなん

か見ないよ、テレビの危機だ、などと言われますが、映像祭をやっている、大学の授業とも連動して映像作品を見せていますと、学生がやって来まして、「先生、テレビって本当は面白いんですね」って言うんです。学生さんに「テレビは本当は面白い」って言わせている今のテレビの状況こそが問題なのではないかと私は感じています。ですから、全国津々浦々、本当に色々な問題を真正面から向き合っている制作者、或いは若い人たち、そういう人たちの発信を今後も絶対応援して行かないといけない、その思いを強くしています。今回いただいた賞は、そうした全国の多くのサムライたちやもの作りに挑む若い人たちと一緒にこれからも地方のもの作りを盛り上げていけ、もっと頑張れという叱咤激励だと思って、有難く賞を受けたいと思います。ありがとうございます。(拍手)

グランプリ 優秀賞 BS1スベシヤル

「ワタシたちは ガイジンじゃない！」
制作：NHK名古屋放送局



＜表彰状＞ NHK名古屋放送局は、出稼ぎという形で祖国に戻ったブラジル人の夢と現実を長く取材してきました。この番組は彼らが住む団地の俄か舞台で、その30年を演じる一人芝居と、それを見つめる彼らの中継スタイルで描き、「ガイジンじゃなく同じニンゲンじゃないか」という心の叫びを、コロナ禍で弱者にしわ寄せがいく現代の病巣にまで繋げて見せました。このスタイルを着想したドキュメンタリーとドラマ相互の知恵の交換と、宮藤官九郎・イッセー尾形という二人の才能を結び付けた最新鋭のテレビを目指す努力を評価し、ここに放送人グランプリ 優秀賞を贈ります。(拍手)



【講評】渡辺 紘史 氏 (委員長)

名古屋に住む在日ブラジル人たちの話は、ドキュメンタリーとしてここにいらつしやる板垣さんもずいぶん沢山作って来られました。そうしたものを素材にして今回新しくユニークなスタイルで素晴らしい番組を作って貰いました。その素晴らしいさは、先ほどの会長が読まれた表彰状にあります。私は、ここの中で、ドキュメンタリーとドラマの知

恵の交換ということについて、少し名古屋という地域、或いは名古屋のNHKと言いますか、そこに拘って、ちょっと独断かも知れませんが個人的な思いも含めてお話ししたいと思います。

私は53年前にNHK名古屋に赴任しました。今もそうですがNHK名古屋はキー局でもありますし、ローカル局でもあります。全国放送、中部向けの放送、そして愛知県のローカル放送、すべてあります。ラジオやテレビ、ドキュメンタリーからドラマ、芸能、教育、教養、地域情報番組、あらゆるスタイルのあらゆるジャンルの番組を名古屋の赴任者、転勤者はやらなければなりません。私もその中で、本当に沢山の種類の番組を担当いたしました。それは非常に良かったと記憶しております。



それから、名古屋の放送会館は今から30年前に建てられましたが、そこは一つのフロアーに、放送を出す主調卓を中心に制作部・報道部などあらゆる人間が雑居して働いていることで、当時話題になった覚えがあります。多分「知恵の交換」というのは、そうしたNHK名古屋のあらゆるものに触れ合える環境を、旨く使って身につけられたものだ

思います。「知恵の交換」については後で話していたかも知れません。

もうひとつ、名古屋というところは、徳川御三家の七代藩主・宗春、かぶき殿様として有名ですが、それ以来、芸所の名古屋ということで、いろいろのものを面白がって芸能化する伝統のあるところだと承知しています。三河万歳 尾張万歳、大須の劇場が今も健在であり、また色んな有名な劇場が建って、西川流の踊りもありますし、色んな芸能が名古屋から出ています。そう言う雰囲気が多分、背景にあったんじゃないかと言う気もしています。

いずれにしろ、そういう風に思わせるほどの才気が迸るような、しかも感動的なドキュメンタリーというかドラマというのか、そう言う番組が出来たのを私は喜ばしく思います。

これは願わくは、でありますけれども、会場にはNHK出身の人も多いと思いますので申し上げますが、NHKのプロデューサーたちは殆ど地方を経験しています。そういう地方の多様なものを身につけて、それを日頃の制作に活かしていく、これは極めて素晴らしいことではないかと言つことを自覚して、周りにもそう言う論を広げていただければ有難いと思います。あえて、ちよつと付け足しで加えました。本当におめでとうございました。(拍手)

【受賞者の言葉】 板垣 淑子 氏

元 NHK名古屋放送局報道部

報道番組チーフ・プロデューサー

現 NHKニュースウオッチ9編集責任者

この度は大変な賞をいただきましてありがとうございます。私、名古屋には去年まで3年間、赴任していました。新人時代は仙台

局で4年間お世話になったんですが、その後は、地方に異動するチャンスが中々無くて、大型シリーズに組み込まれることが多く東京にずつといて、久しぶりの地方局で、局全体が見渡せる規模の自由度の高い名古屋局に配属されて、ドラマと一緒に番組を作るというチャンスを頂きました。



今、思つて見れば、川上君というドラマのディレクターと仕事をしたんですが、仕事をする切っ掛けは健康診断の時にX線写真を撮ろうと思つて並んでいたら、たまたま川上君が私の後にいて「外国人労働者の番組を板垣さん、沢山作っていますよね、ぼく、それで『よるドラ』を作りたいんですけど、どう思います」って雑談してくれて、それがきっかけで、「あつ、この人、外国人労働者のしかもリアリティーな報道の現場に興味を持ってくれているんだ」って分かり、その後、川上君は育児休暇に入ってしまうんですけど、休暇中の川上君を居酒屋に呼び出して、日系ブラジル人30年目の節目の年だから何か一緒にやろう、「地方局の開発番組」として何かやってみようというスタートしました。その居酒屋談義から始まって、川上君が「クドカン(宮藤官九郎)さんちよつと口説いてみていいですか?」って言うんで、「ダメ元だよ

ね、地方局の番組だしね」って言つてたら、二週間ぐらい経つて、夜中に川上君の電話が来て「クドカンさん、OKになりました!」って言つて、そこから、「じゃ私、全国放送のワク取りに行くね!」となつて、凄く楽しく開発番組を大きく育てながら制作に邁進してきた半年間でした。

あの宮藤官九郎さんとイツセイ尾形さんとのコラボで一人芝居を実現していくんですけど、取材の現場は報道の現場で体験したことがあるんですが、台本の下読みとか、台本の練り直しとか、そう言う現場に立ち会えたのは、とっても幸せで、イツセイ尾形さんと宮藤官九郎さんという両巨匠の間で、川上君がサンドバックのようにボコボコにされている姿を横目で見ながら、それを私もなんとか支えようと思つて……。それで、両巨匠の才能と川上君の頑張りで、舞台が出来上がっていました。イツセイさんの一人芝居の舞台で、実際に名古屋市内の団地で孤独死をした日系ブラジル人の30年を描くことになりました。



本番は、その孤独死が実際に起きた団地の孤独死をしたベンチで、一人芝居を収録したんですけれども、何と言うか初めて芝居を見て鳥肌が立って、真つ直ぐ立っているのも辛いらしいの経験をするのが出来ました。一人芝居はちよつと喜劇の要素も入っていたんですが、最後に、孤独死の場面では、見ている日系ブラジル人の多くの方々が日本語の一人芝居に涙を流して下さつて……。『あつ、ドキュメンタリーと一人芝居の融合で何か別の感動を伝えられたんじゃないか』という手応えを初めて得ることが出来ました。

私はその後、東京に戻つて、今は「ニュースウオッチ9」の編集責任者を任されているのですが、何かその時に培った鳥肌を忘れずに、新しいテレビの開発に邁進して行きたいと思つております。ニュースウオッチ9が変わつたら、「あつ、板垣もなんか奮闘しているな」って思つて頂ければ幸いです。

今後この賞を励みに頑張らせて頂きます。今日は本当にありがとうございました。(拍手)

制作部(ドラマ)ディレクター

川上 剛 氏

NHK名古屋の川上剛と申します。本日は素晴らしい賞をありがとうございました!素晴らしい賞をありがとうございました!

板垣プロデューサーから話があったように、健康診断のX線の列での雑談からこの番組は始まりました。自分はドラマ部なので、報道番組部とはセクションが確かに違いますが、会社で勝手に席を分けて垣根を作っただけなのかなと、普段からそう思うようにしています。人として憤つたり面白いと思う所は同じですし、僕は元々ドラマ屋ではなく、ただのディレクターでありたいと思つているので、そういう垣根を超えた番組作りが今回出来たことは、本当に有難く幸せに思つ

ています。

愛知県は6万2千人と、ブラジル人が日本で一番多いところで、日本の10年・20年先の姿を見ようという街があつて、僕はすごく気に入っています。30年も前からブラジル人が多く暮らす団地が何カ所もあつて、そこに通い番組の構想を練りました。コロナ禍の時節柄、脚本家の宮藤さんにはリモートで、出社を通じて「この方がセルジオさんです！」「という風にブラジル人に会ってもらい、脚本の材料となるエピソードを取材しました。



ブラジル人が日本の工場で、時に理不尽な日本式作業に困惑した話とか、団地の細かすぎるゴミ捨てルールに辟易したエピソードとか、団地の公園のベンチで孤独死したホームレスのブラジル人の実話（第4幕のロベルトのモデル）を、イッセー尾形さんが一人芝居で演じるというスタイルの番組だったので、一緒に取材していた植村ディレクターに、実際にホームレスの男性が亡くなったベンチに連れて行つて貰った時に、「あーここであればいいんじゃないかな！と、ひらめいたんです。「フォレスト・ガンプ」じゃないんですけど、「このベンチで、ホームレス

の男性にもし会えるとしたら、どんな思い出話をしてくれるんだろう？」と。そしてそれを実際に団地に暮らすブラジル人と日本人の前で演じたら、ドラマや報道の範疇を超えた、なんか大変な番組になるんじゃないかという着想がありました。

最後に、学生の頃出会った一冊の本が、実はこの企画に繋がっているという事を披露させて頂きたい。20歳の頃図書館で、イギリスの作家サマセット・モームのインタビュ記事を読んでいたら、モームがインタビュアーに「何人が好きですか？」って聞かれ、モームは「いや、私はフランス人が嫌いだ、ドイツ人も嫌いだ、アメリカ人も嫌いだ、イタリア人も、中国人も……あらゆる人種は嫌いだ」と言い出したんです。今で言えば大炎上するような話で、慌てた記者が「モームさん、それじゃあなたは何人が好きなんですか？」と聞き直したら、モームはひと言「私は私の友だちが好きだ。(I like my friend.)」と答えたんです。

青鬼いんですが、その時の自分の「そうだな。人間誰とでも友だちになれるし、国籍なんて関係ないよな」という、いつか誰かに訴えたかった感動を今回番組に出来たことは、最高に幸せだったと思っています。テレビは確かに斜陽が叫ばれていますが、そういった「少しでも世の中を良くしたい」という気持ちをお忘れずに進んで行けば、まだまだやるべきことは多いですし、突き詰めて行けばドラマとか報番組とか、そんな垣根はなくなるんじゃないかと、また青鬼いことを言ってますが、そう思っているの、今後とも精進して参ります。今日はどうもありがとうございました。(拍手)

報道部(報道番組) チーフ・プロデューサー

石田 望 氏



【寄稿】今回、番組制作に加わるようになったとき、これまでにない「新しさ」を感じたことを覚えています。日系ブラジル人のみなさんの30年を、イッセー尾形さんの一人芝居、それも「取材現場である団地の真ん中」で、「当事者の皆さんを前に」演じる。ディレクター達が取材してきた一つ一つの人生、それがイッセー尾形さんの「芝居」を通じて伝えられたとき、会場に集まったみなさんは何を感じたのだろうか？そして、それを、テレビを通じてご覧になる視聴者は何を感じるのだろうか？芝居が演じられる『その場』自体がドキュメンタリーなのだと感じました。制作するにあたっては、『その場』がなにより重要だということをチームで再確認し、観客のみなさんとにかくお話を聞こうと話しました。

笑いあり涙ありの芝居。その幕間に、カメラを手にその場に観にきてくださった方々の取材を始めます。そこには、日系ブラジル人のみなさんだけではなく、近所に暮らす日本人のみなさんもうらっしゃいました。文化も習慣も違う中で、共に暮らすということは、簡単なことではなかったはず。みなさんが、芝居にそれぞれの日々を重ねていらつしやいました。同じ空間を共有しているからこそその言葉がありました。

番組の編集作業では、届ける形を常に模索しつつ、継続して取材を続けることの重要性

を再認識しました。これまで長年積み上げてきた膨大な取材、そこに記録されている道のりが今回演じられた芝居と重なったとき、それはまた今の時代に伝わる力を得た気がいたします。



制作部(ドラマ) チーフ・プロデューサー

三鬼 一希 氏

【寄稿】この度は「放送人グランプリ2021」優秀賞にご選出いただき、誠にありがとうございました。大変栄誉ある賞を頂きまして、感謝の念に堪えません。

今回の番組は、NHK名古屋局の中で、報道番組部とドラマ制作セクションがコラボレーションするという中で立ち上がったものです。

きっかけは、若いディレクターたちの情熱でした。

「日系ブラジル人の皆さんの30年」というテーマを、より多くの人に知ってもらいたいという情熱です。

それは、ドキュメンタリー番組という方法だけでなく、またドラマというフィクションという方法でもない、作品(番組)になっていきました。



ドラマ制作一筋の私は、当初はドキュメンタリーを補強する再現VTR的なものをドラマの文法で行うくらいだと思って参加したのですが、予想をはるかに上回る事態となっていました。

それが、『希代の喜劇作家・宮藤官九郎×一人芝居の第一人者・イッセー尾形』のコラボ。それも野外の舞台で行うライブパフォーマンス。実現すれば凄いことだと直感しましたが、まさか実現するとは正直思っていまませんでした。

しかし、宮藤官九郎さん、イッセー尾形さんともに、テーマに強い関心と共感をもっていたので、まさかの『快諾』をいただけました。その時には、正直腰が抜ける思いでした。

その後は、何度となくお二人とお話を重ねながら、丁寧に丁寧にストーリーを紡いでいく日々。そして迎えた舞台の本番。観客としてお越しいただいた日系ブラジル人の皆さんのお顔を拝見したときに、この番組の意義をあらためて痛感し、この瞬間に立ち会えたことに無上の喜びを感じました。

今回、このような賞をいただけたことは、そのことが多くの人々に届けることができたからだと思っています。その意味で、本当に

嬉しく思っています。

最後になりますが、宮藤官九郎さん、イッセー尾形さん、ほか多くの方々との出会いに感謝するとともに、私も一放送人として、今後多くの人々に喜んでもらえる番組を制作しているよう頑張っていきたいと思っています。ありがとうございました。

報道部(報道番組) ディレクター

植村 優香 氏



【寄稿】この度は栄誉ある賞をいただき、本当にありがとうございました。私は愛知に赴任後、この地域の外国人住民の多さに驚き、日系ブラジル人たちの取材を始めました。そこには、日本経済に翻弄されながらも日本で懸命に働いてきた彼らの姿があり、同時に、変わる地域の風景に戸惑いながら見守ってきた日本人たちの姿もありました。

「教育」「社会保障」「雇用」などの切り口で日系ブラジル人に関するいくつかのドキュメンタリーを制作する中、ドラマ班と交流し、この番組は立ち上がりしました。このテーマにおいて、報道としてのドキュメンタリーの限界も感じていました。彼らの声を伝えるときに、それが彼らにとってではなく日本社会・日本人にとってどんな意味があるのかということに常に求められる。「ともに生きていく」というメッセージを伝えたいのに、そもそも視

聴者として彼らの存在が想定されていないもどかしさがありました。

この番組で目指したのは、日本人にもブラジル人にも見てもらうことでした。両者を観客に想定し、「ブラジル人はこの表現をどう思うか」「日本人がこの設定についてどこまで知識があるか」など、脚本の宮藤官九郎さんと綿密に相談を重ね、通訳の方にもポルトガル語でも、『笑って泣ける』翻訳にご尽力いただきました。結果として、イッセー尾形さんが団地のど真ん中で演じたその物語は、想像した以上に多くの人たちの心に届きました。『ナニジン』でもなく『同じニンゲン』として共有した感動に包まれた終演後の空気は忘れられません。

言葉の壁、コロナ禍の壁、さまざまな壁にぶつかりながらでしたが、本当に多くの方の想いで完成した番組です。改めまして、関係者の皆様にお礼を申し上げます。

番組の放送から10ヶ月が経ったいま、オリパラ開催の様々な経緯の中で、日本の多様性の残念な現在地がますますと露呈してしまった気がします。このテーマには、これからも向き合う必要があります。

©テレビ東京

グランプリ 優秀賞

「人生最高の贈りもの」

製作：テレビ東京 ホリプロ

【表彰状】 娘は、余命わずかと言われた残りの人生を、夫と父それぞれと過す。そうと、一人暮らしをする父のもとに突然帰って来ます。娘の真意を図りかねる父との関係は、大事件や激しい波瀾万丈の展開はなくても、心の機微に優しく触れていく人間の繋がりが伝わってきます。

最近少なくなった日本のホームドラマの心髄を想起させる秀作であり、制作したドラマの

達人達とスタッフの努力、放送したテレビ東京・ホリプロの英断を称えて、ここに放送人グランプリ 優秀賞を贈ります。(拍手)

(中央) テレビ東京 田淵 俊彦氏



(左) 演出 石橋 冠氏

【講評】 吉田 賢策 氏 (委員)

(花東を八木さん) 本当におめでとうございます。渡辺さんから「普遍性」という言葉がありました。まさに普遍性のあるドラマだと思います。私なりの言葉で言うと、思いやりのあるドラマだな、人間性がすごくあって暖かいドラマだなと感じました。

この作品は、今年の正月、テレビ東京さんの新春ドラマだったんですね、感動して、じわっとくるんです。コロナ禍で一人一人が言葉も交わさない時代になって、そんな中で、表彰状にある「心の機微に優しく触れていく人間の繋がりが」は、今年のテーマではないかと思います。

最初、このストーリーの展開が分からなかったんです。岡田恵和さんの脚本ですが、ちょっと謎めいた展開なんです。娘(石原さとみ)

さんが親 寺尾聰 のとこに帰って来るんですが、親は何で帰って来たか分からない、でも



段々解き明かされて、娘さんはお父さんに何か伝えたいと思って、一緒に過ごしたいと思つてポストンバッグを持って帰って来た。
で、お父さん、段々分かってきた。夫のところに行って、その謎が分かってしまった、余命わずかのガンだった。でも、娘さんは親には言えないが、残された時間を一緒に過ごそうと思つた……。

「思いやり」というか、人を感じる心が伝わってくるんです。娘が親を思う、親が娘を思う。それから、娘が夫を思う、夫が妻を思う。そんな思いが交錯します。

まさにホームドラマの原点はここにあるなと、そう思いました。脚本・プロデューサー・演出はプロフェッショナルな技で、八木さん、石橋さん、テレビ東京さん、ホリプロさんは、見事なドラマに作り上げました、本当に感動しました。これは放送人グランプリの賞にふさわしい作品だと、見終わつた瞬間

に思いました。



そして、ひとりひとりの俳優さんの表情が素晴らしいんです、寺尾聰さんの皺の表情、石原さとみさんのちよつとツンとした感じで、でも親を思う表情。俳優さんも勿論良いんですが、それを引き出した演出さん、石橋さん。それから八木さんとテレビ東京さんのキャストイング、テレビ東京さん・ホリプロさんの素晴らしい制作能力、すべてに放送人グランプリの賞を差し上げたいと思ひました。本当に今日はおめでとうございます。(拍手)

【受賞者の言葉】 田淵 俊彦 氏

(株) テレビ東京 制作局 企画委員



この度は、「放送人グランプリ2021」グランプリ優秀賞を頂き大変光栄です。ありがとうございます

ございます。

実はこのドラマの脚本を岡田恵和さんから「読んでみてほしい」と預かったのはずいぶん前のことで、それから八木さんのお力を借りて社内を通すまでに時間と労力を要しました。今はコロナの影響で少し増えましたが、当時は「ホームドラマ」といえば「古い手法」「過去の産物」ととらえられ、決して手放しに歓迎されるジャンルではありませんでした。しかし、「だからこそのやるべきだろう」という思いもあり、粘り強く社内説得を試み、石原さとみさんが「是非、演じてみたい」と仰つてくださったことが追い風となり、制作できることになりました。

なぜ、私がそこまでこの作品にこだわったのかということについては、脚本を最初に読んだとき涙が止まらず、「私はこういうドラマを人々に届けたかったのだ」と改めて感じたということが理由としてありました。そんな思いをベストな形で実現してくださった石橋監督、制作会社ホリプロさんに改めて御礼を申し上げます。

皆さん、ありがとうございます。(拍手)

石橋 冠 氏

演出家 (会員)



僕はホン直しというのを良くやるんです、

演出家がこゝ直せ、こゝ直せと言っていますが、八木さんが作ってきた脚本が素晴らしいので、一切直さずに初めて脚本通りに撮つたドラマでした。寺尾君が良かったし、石原さとみさんも良かったし、演出家としては非常に楽しい仕事でした。

田淵さん、ありがとうございます。(拍手)

八木 康夫 氏

プロデューサー (株) オッティモ



普通は最初から放送が決まっています、それを目掛けて作るんですけど、これは成り立ちがすごく特殊と言いますが、キャストも放送局も一切決まっていなくて、たまたま岡田さんの時間があつて、岡田さんと「自分たちの作りたいドラマの脚本を作りますか」ということで出来た台本です。本当に素晴らしい。でも、これは日本の民放の現状では、中々実現しないよってことを話ながら作つたんです。

それを田淵さんに読んで頂いて、走り回って頂いて、実現した企画なんです。最初は、「本当に実現したら、いいよね！」って台本を作つたんですけれど、それがこう言うドラマになって、賞を頂いたことは誠に望外な喜びであります、本当にありがとうございます。(拍手)

グランプリ 優秀賞

南海放送ラジオ報道特別番組

「感染―正義とは何か―」

【表彰状】 この番組は新型コロナウイルスをめぐむ差別をテーマにしたもので、愛媛県内で起こった複数の問題を起点に、約10年前のお遍路さんへの感染症差別やハンセン病患者の歴史を紐解きながら、差別と感染症のつながりを掘り下げていきます。ウイルスの本当の恐ろしさは、それ自体だけではなく、人間が人間の思考を失うことです。この緊急特番は丁寧な取材をもとに感染症に怯える人間の闇の部分を描き、新型コロナウイルスから人の「正義」とは何かを問うています。ラジオオドキュメンタリーの傑作として、ここに放送人グランプリ優秀賞を贈ります。



(左) 宮部 選氏

【講評】 三原 治 氏 (委員)

(花束を渡して) おめでとございます。南海放送さんはテレビでも質の高い番組をいっぱい作られているんですが、ラジオでも名門です。名門には理由もあるんです。代表取

締役会長の田中和彦さん自身がラジオ好きで、DJとして『ヒコヒコジョッキー』『ラジオマンの憂鬱』の番組を担当されたり、ラジオドラマの脚本を書いた作品がギャラクシ―賞優秀賞を受賞したりして、非常にラジオに対して熱心だからです。

実は、今回受賞の「感染(略)」は、各賞を総ナメしております。日本民間放送連盟のラジオ報道番組部門最優秀賞、文化庁芸術祭ラジオ部門大賞(芸祭の賞のトップです)、放送文化基金賞、ギャラクシ―賞、そして、この放送人グランプリと、賞を総ナメにした作品なんです。



賞を取ったから言うのでは無いですが、いつも南海放送さんの作品というのは、愛媛に根ざしたテーマをちゃんと作ってきていて、その視点も非常に個性的で独特です。今回のコロナに対しても、『差別』という視点から切り込んできました。放送は2020年の5月30日でした。コロナの感染は3月から拡大してきましたから、2か月でこの作品を作り上げたスピード感は驚異的でしたし、最初にコロナをテーマにしたラジオオドキュメンタリーとして、私どもは度肝を抜かれました。この後も、差別をテーマにコロナ禍を取り上げる番組はありませんでした。それだけ

に、難しいテーマを早くに挑戦されたことに価値があったと思っております。

2020年は、戦後75年であったり、東日本大震災10年であったり、SDGsであったり、そしてこのコロナと、非常に大きなテーマが盛り沢山な年で出来のいい作品も多かったなか、放送人グランプリは、その中でも、南海放送さんの「感染(略)」を選ばせて頂きました。

先ほどの賞状にもあるんですが、例を挙げると「感染者は誹謗中傷に耐えられなくなつて自殺したらしい」という噂が飛び交い「これが4月のことでした。それから「感染者はどこに誰か?」の犯人捜しで、半日も経たないうちに「特定」されてしまいます。感染は一気に広がり、病院や高齢者施設でクラスターが発生すると、「こんな施設閉めてしまえ!」、「人殺し!」というような心ない声が出回ります。ウイルスの感染スピードを遙かに超える速さで、誹謗中傷などの人権侵害が拡散して行きます。

「新型コロナウイルスの本当の恐怖は、ウイルスそのものでは無く、私たち人間が人間では無くなることではないか」という警鐘がありました。人権侵害は、ひとりひとりの「正義」に基づいて広がります。なぜ、本来は人を守るはずの「正義」が、人を攻撃しているのでしょうか。新型コロナウイルスから人の「正義」とは何かを問うラジオオドキュメンタリーです。

新型コロナウイルスの感染という出来事から、医学的、政治的な対応問題ではなく、人間ならだれでも陥るであろう「正義」という名のもとに行われる「差別や偏見」というものの怖さや愚かさを突き詰めた、深く考えさせられる見事なラジオオドキュメンタリーでした。

このテーマで質の高い作品に仕上げたディレクターの植田さんは、愛媛からお見えになれませんでした。どうか宜しくお伝え下さい。

い。本当に良い作品でした、ありがとうございます。(拍手)

【受賞者の言葉】

南海放送株式会社

取締役執行役員メディア編成局長

山内 孝雄 氏

【寄稿】 コロナ禍でマスクとともにソーシャルディスタンス、テレワーク、アクリル板などといった新しい生活様式が日常となりました。また東京五輪が1年延期の末、無観客で開催されるなど、コロナ以前では想像すらできなかった出来事が次々と起こりました。



残念ながら第5波という大きな感染の波が生じたため、せっかくご準備いただいた贈賞式に出席することは叶いませんでしたが、細心の注意を払われ贈賞式を執行いただきました主催者のみなさまには大変に感謝しております。

愛媛県内でコロナに感染された方々に対する誹謗中傷をテーマに弊社の植田竜一ディレクターが取材を開始して、はや1年半になりました。

彼は取材を通じて、番組のコンセプトを新型コロナウイルスの本当の恐ろしさは

ウイルス自体だけではなく、人間が人間の思考を失うことである。人権侵害は、それぞれの『正義』に基づいて広がる。本来は人を守るはずの『正義』が、人を攻撃していく。新型コロナウイルスから人の『正義』とは何かを問うとしました。

歴史に残るであろう新型コロナウイルスによるパンデミックのかなり早い時期に、地方からコロナ感染がもたらした誹謗中傷やデマの流布というヨコ軸に、過去の感染症による差別的歴史というタテ軸の視点を加えたラジオドキュメンタリーを、短期間で植田ディレクターが制作してくれたことは、南海放送に脈々と流れる番組作りに対する情熱を彼が継承しているからだと思います。

またラジオだからと言って取材に応じてくださった関係者も多く、音声コンテンツならではの特性を活かした番組になりました。

大変な時期に取材にに応じていただいた関係者の皆様に深く感謝しております。

南海放送は「愛媛主義」というテーマを掲げ、常に地元愛媛県を見つめ、地域密着の視点で企業活動を行っています。地域で起こった出来事で制作した番組でも全国に発信できるテーマがあるんだと改めて感じさせていただいた受賞でした。

この度は名誉ある賞をお贈りいただき誠にありがとうございます。

上席執行役員 東京支社長

宮部 選 氏

本日はこのような素晴らしい賞を頂きましてありがとうございます。愛媛県の南海放送の宮部と申します。ディレクターの植田が直前まで出席予定だったのですが、今週に入りまして新型コロナウイルス感染拡大のため、本人も凄

く残念がっていましたけれども急きよ欠席となり、私、東京支社より代表でこちらにお邪魔しました。

今も過分なお言葉ありがとうございます。冒頭、渡辺委員長さまからもありました。様々な視点の中の地方性・地域性と言うところを評価頂いたのだと、有難く思います。

未だに続いております新型コロナウイルス感染拡大ですが、昨年、愛媛でも2月、3月くらいから、じわじわと押し寄せる中、誹謗中傷や差別といった事案も生じました。一つのきっかけと言ったら恐縮ですが、差別という非常に大きな問題を考える番組として聞いて頂ければ幸いです。



5月30日に放送され、当時私は本社に勤務しており、愛媛で番組を聞きましたが、その後、昨夏から転勤でこちらに来ており、東京でも様々な事象が散見されています。

植田からメッセージを預かっておりますので、紹介させていただきます。

「この度は名誉ある賞をいただきまして、ありがとうございます。様々な理由を付けて感染者の詳細な情報を開示するよう求めた、誹謗中傷の手を止めない人が今も沢山いるようです。この番組に、大した力は無いと思いますが、感染者数などの数字の裏には、

数え切れないほどの人権侵害が事実であったことを、未来に向けて記憶する役割が果たせれば幸いです。」

愛媛県の小さなローカル局ですけれども、今後も番組などを通して出来るだけ発信して行きたいと思いますので、引き続き皆さまのご指導・鞭撻のほど宜しく願います。本日は、ありがとうございます。(拍手)

報道局報道部

植田 竜一 氏



【寄稿】このたびは大変に名誉ある賞を賜りまして誠にありがとうございます。この道の大先輩という言葉では足りないくらいの大先輩の方々から評価いただけましたこと、何よりうれしく思います。

学生時代に歴史を研究していたこともあり、番組や企画を作るうえで行き詰った時に過去の出来事を繰ってみる癖があります。今回も図書館で感染症と地元の関係を調べてみました。ある事実にとり着いたとき、哑然としたことを今も覚えています。10年前にコレラが大流行した際、四国で生きる社会的弱者が「菌を媒介する不潔なもの」として排除された

いうのです。なぜ、私たちは歴史を繰り返すのか。

『感染』―正義とは何か―という番組は、新型コロナウイルスをめぐる全国各地で起こっている差別や偏見、誹謗中傷の原因を探りつつ、どう位置付けるかというテーマで取り組みました。そのためには、今起きている事象を深堀取材しないといけない。そしてそれは大局的に見た時に、何を意味するのか考えないといけない。「マスコミのせいで感染や差別が広がった」などと取材を断られ、さらに緊急事態宣言の発令により取材活動の自粛を余儀なくされるなど、越えなければならぬ壁に押しつぶされそうになったこともありました。しかし、「いつかこの感染症が終わったら、美談としてまとめられるかもしれない」、「次の新たな感染症が起きた時に、また人間は悪行を繰り返すかもしれない」という、憤りともとれる熱意だけで、それらの壁を乗り越えていきました。

番組の放送前は、ローカル局のしかもラジオ番組がどれほどの力を持っているのか懐疑的でした。しかし、番組放送開始直後から局の電話や問い合わせのメールが殺到。さらに、同じ業界の方々からも番組を、取材してくださるなどうれしい反響もありました。

ただ、社会は何も変わっていません。新型コロナウイルスをきっかけとした人権侵害は繰り返されています。このままではまた歴史が繰り返されてしまう。一人ひとりの危機感を醸成するために微力ながらも、引き続き番組を通して訴えていきたいですし、それこそが今求められる放送の使命なのではないかと信じています。

グランプリ 大賞

金本 麻理子 氏

株式会社 椿プロ 代表取締役
ディレクター「プロデューサー」

〈表彰状〉 あなたは戦争という巨大な力に振回される市民とその家族を追続け、売春・臓器売買・DVなど壮絶な難民キャンプの実態を貴重な映像に残しました。更にコロナ感染拡大で弱者として切り捨てられる人々の姿を炙り出し、「レバノンからのSOS」コロナ禍追い詰められるシリア難民」などに結実させました。世界で最も過酷な現場に自らカメラを持ち込み、女性と子どもに寄添い記録した意義は大きく、人の懐に飛込む能力、家庭に入りこみ日常を撮影する力は傑出しています。あなたの実績と能力を称えて、ここに放送人グランプリ大賞を贈ります。(拍手)

金本 麻理子氏



【講評】 新山 賢治 氏 (委員)

(花束を渡して) おめでとうございます。

「レバノンからのSOS(略)」がBSで100分にわたって放送されたのはちょうど1年前の7月12日です。世界中にコロナの波が押し寄せる頃で、聞けば、レバノンでも初めて緊急事態宣言が出て、それまでの取材を終えていざ出国しようと、金本さんたち取材クルーが空港に向かう時に、国外に出ることが出来なくなりました。「さあ、どうしよう」となって、

ここはプロデューサーの英断も中々だと思うんですが、「それなら、現場に居ろ」ということになった。そこから先、現場で起こっていたこと、それを記録した映像はいろいろな意味で放送史に残る貴重なものだと思います。

取材や撮影のスタンスには「二人称」、「三人称」とあると思いますが、金本さんのスタンスは「二人称」というか、現場に家族の一員となつて、丁度良いポジションで撮り続ける、それを恐らく映像として、次々積み重ねて行く……おそらくそれは、2020年12月に放送された「踏まれた花にも花が咲く」(注1)で体身に付いた、立ち位置だと思っています。

金本さんがシリア難民というテーマに向き合ったのは2020年3月にBS特集「僕らに春が来るのか?シリア難民の子どもたち」(注2)です。これを起点にシリア難民を追った二連の長時間ドキュメンタリーが続き、今ここに辿り着いています。



僕は、1980年代にアサヒグラフを読んでいたんですが、そこでテレビマンユニオンの村木良彦さんとNHKの吉田直哉さんが「連続ドラマがあるんだつたら、ニュースやドキュメンタリーにも連続ものがあっても良いのではないか」と言っていたのです。その記事の切り抜きを今でも持っています。金本さんの一連の仕事を見た時に、これは『連続ドキュ

メンタリー』だと、先輩たちに「ドキュメンタリーもここまで来ましたよ」と堂々といえると思いました。

それともう一つ、大切だと思うのは編集の現場です。恐らく無我夢中で撮ってきた映像は、今の時代は山ほど溜まって、それを編集室に持ち込んでラッシュに入ると、そこにもう一つの現場が生まれる。それを反芻していくと、現場で気付かなかったことを再発見して行く……。SNSなどの瞬時の発信に比べ放送が優れていると思うのは、ポストプロの現場での再発見力だと思うんです。今日列席している、プロデューサーの塩田純さんや東野真さん達、長年チームを組んでいるみんなが、編集室で新たに取材し発見し、メッセージをあげり出したのだと思います。これが今のテレビドキュメンタリーです。本当に、おめでとうございます。

(編集部・注1)

戦中戦後、日本の焼け野原で生きた女性の保護と更生に人生をかけた祖母の生き方を、孫としてディレクターとして、自分自身の今の生き方を問うように記録した番組。

(編集部・注2)

アラブの春から2年。泥沼の内戦状態のシリアから、隣国ヨルダンに逃れた少年2人。いつか祖国に戻ることを信じ「春よ来い」と願う、彼らの7か月間を追う。

【お祝いの言葉】

(株) NHKエデュケーションナル

コンテンツ制作開発センター

美術教養グループ 制作主幹

塩田 純 氏

金本さん、おめでとうございます。今、思い返すと去年は大変だったと思います。元々はコロナの取材ではなく、シリア難民を継続的に撮るといのが目的で、5年ぐらいつと撮っていたんです。レバノンで、臓器売買や売春で非常に難民が苦しんでいる状況を撮ろうとして、その最中に、3月15日非常事態宣言が出てレバノンから帰国出来なくなつたんです。

プロデューサーとしては凄く驚いて、出られなくなつてどうしようかとなつた時に、メールだけのやり取りで、「撮ろう」と思いました。彼女の撮る力は凄く、危機的な状況の中でもちゃんと安全ということも考えながら、しかし撮るべきものは撮ることが出来る人だと、私は思っていたので「撮ろう」と思いました。

後はメールだけのやり取りで、難民キャンプに通うことにしました。一回バイルートのホテルで感染者が出た時は、拙いなって思つたんですが、ホテルを変えて、その後、彼女は撮ることに専念して貰ったんです。同時に、どうやって出国するかということも大変で、結局、日本の臨時便は飛ばないことが分かつて、それから予約の外国の臨時便が3回くらい空振つて、ようやく5月初めの臨時便で出て来てくれた時は、本当にホッとして良かったなと思えました。



その後、ラッシュを見て、本当に良く撮れて

いてビックリしました。今までも、本当に良く撮れていたと思うんですが、今回くらい凄まじいものは無かったと思いました。あまりに凄まじ過ぎて、私がカットしてしまったシーンが幾つかあって、本当に免なさい。それはちよつと放送に出せないうと思ったほどに酷かったものですから……。

彼女の撮る力はみんな分かってらっしゃると思うんですが、同時に撮っている人が単なる犠牲者ではなくて、主体的に生きて行くという姿に共感して寄り添っているところが、私はいつも感動させられます。それが、彼女が言葉も通じない相手から信頼されて、あれだけの映像を記録出来る力なんだと思っています。

それとここでひと言申し上げておきたいのは、彼女は椿プロという小さなプロダクションの社長です。殆ど一人で頑張っていますが、経済的には火の車で、このパンデミックでは本当に潰れておかしくない状態なんです。大手のマスコミにいては分らないと思うんだけれども、小さなプロダクションで頑張ると言うことが、どれほど大変かということを、私は横で見ている本当によく分かるんです。だから彼女がグランプリ大賞を取ってくれたことは、とっても嬉しい。

私はNHKという大きな組織にいてある意味で守られているんですが、だけど彼女は本当に一人で、徒手空拳でここまでやって来た。前に勤めていたプロダクションは潰れちゃったんですね。それでもやりたいと思って、自分で会社を起してやっている、そう言う作り手がいることを皆さんに分かって頂いて、グランプリを与えて頂けたことが、私は本当に嬉しいし、これからも皆さんに是非支援して頂きたいと思います。ちよつと長くなって済みません。(拍手)

【お祝いのメッセージ】

女優 大竹しのぶ 氏

(DVD映像 金本さん、放送人グランプリ大賞受賞おめでとう、ございます。大竹のぶです。私はファミリーヒストリーという番組(注)で初めてお会いしました。金本さんのおかげで、私は自分の両親、自分のルーツを知ることが出来て、今ここに私の意味さえも知ることが出来ました。



その後、「父を捜して」日系オランダ人終わらない戦争」や「レバノンからの SOS」(略)でナレーションをしましたけれども、本当にいつも思うことは、番組に対する熱意ですね。それは一体何処から来るんだろうかと、正義なのか、社会に対する怒りなのか、自分の使命としてやっていらっしゃるのか、本当に金本さんの番組を見ると頭が下がる思いです。

実際の金本さんも、本当に熱くて自分の思うことが溢れ出ているみたいで、「ちよつと待って下さい」と言うことも多々あるんですけれども、そうやって「ずっと走っていた方

なんだー」と思います。

ドキュメンタリーを作ると言うことは、本当に凄いことですよね、過去のことをきちんと勉強して、そして現在の今の姿をさらけ出して教えてくれて、そしてそれが未来に繋がるという大きな役割をはたっているドキュメンタリー、そこで生きている金本さんは本当に素晴らしい方だなと思います。私がそこに少しでもお手伝いする場所があるなら、いつでも呼んで下さいと言う、いつも素直な気持ちになります。今、この状況の中で大変かも知れませんが、金本さんの持つてらっしゃる熱意とガッツで、これからも世界に真実を伝え続けて行なって下さい。

そして金本さんに関わるスタッフの方々も、皆さん本当に大変かも知れませんが、金本さんを中心に彼女に付いていつて素敵な番組をこれからも作って行なって下さい。私も一緒に参加したいです。

本当におめでとうございました。(拍手)

(編集部・注)
2021年1月26日放送「ファミリーヒストリー 拡大版 大竹しのぶ」

【受賞者の言葉】 金本 麻理子 氏

椿プロの金本と申します。本日はこのように励みになる賞を頂きまして本当にありがとうございます。この仕事を始めて27年、30年近く経ちました。自分の会社を始めて今年で10年になるんですが、本当に大きな大きな励み、ご褒美を頂いたような思いです。

最初にディレクターを始めたのは、25歳くらいの時に、在日外国人に密着し日本を見つめるというNHKBS2の「ハローニッポンーわれら地球人」という番組でした。その中で、フィリピン人の方と沢山出会い、出会った中で日系フィリピン人の問題を知り、戦争の

傷跡に興味を持つようになり、日米の戦場となったフィリピンで多くの市民が亡くなった市街戦を証言記録として制作しました。(注2) と言う番組を重ねて行くうちに、戦争というものが私の中で大きな柱になって行き、特に、何処でも何時でも大きな国の事情に、弱い子どもたちや女性たち、市井の人々が巻き込まれているのは同じだなと痛感しました。と同時に、その中で女性たち子どもたちが乗り越えようとする強さ逞しさに非常に惹かれ、人間が本来持っている前を向いて生きて行くことは、どう言うことなのか、そこに私自身本当に感動を覚えました。その中で、自分でカメラを持つて、戦争と女性と子供をテーマに沢山のの人に会って、沢山の現場に行くことが私自身の生きがいになりました。

それが2020年にシリア内戦後のヨルダンの難民キャンプで、難民子どもたちを追うという取材に始まり、去年のレバノンで、コロナ禍で追いつめられた子どもたち女性たち、シリアの人々の番組に繋がって行つた……、点がどんな道になって行つたような形でした。この道を歩んでいる中で、今も歩んでいる最中ですが、先ほど塩田さんも仰ってましたけれども、今も会社が何時潰れてもおかしく無い状況は全く変わらなくて、そういう中にいるんです。

ただ振り返って思っていると、この仕事をディレクターを辞めたいと思ったことは、ただの一度も無かったように思います。それはひとえに、どう言う番組をやるべきか、提案の段階から一緒に導いてくれる、道を捜して下さった塩田さん、東野さんプロデューサーの方々、とりわけいっぱい撮ってきて編集室では支離滅裂になつていて、想像出来ないくらい半ばヒステリー状態になつてることが

多いんですけど、そういう中でも根気よく、どうしたら視聴者に届くか伝わるかと言う事を本当に根気よく導いて下さっているプロデューサーの方々、私の番組のほほほを担当されているのが塩田さん、東野さんなんです。お二人にはお詫びと共に心からの御礼を申し上げます。同時にブラッック企業では無いんですけども、目まぐるしくADさんは辞めて行く中で、その中でもやっぱり番組にするために支えてくれている樺プロのスタッフ、本日、石井佳美さんが来ていますが、見捨てずに助けてくれるスタッフに感謝しています。



そして今、だんだん歳も五十近くになって、コロナ禍でもありますし、なんか怖くなることも多くて、いつまで資金的にも続けられるか？そして何時まで昔みたいに体力を持って続けられるのか、同じ気力でもうちよつと行こう、もう少し撮りに行こうと続けられるのか、不安で怖くて怖くて堪らない時が、最近とみに増えてきました。でも、今日のように放送に熱い思いと愛情を持たれている大先輩の方々に作品を見て頂いて、お気に留めて下さりご評価を頂き大きな勇気を貰った思いです。本当にありがとうございます。

今も8月放送の番組の編集が終わる見込みが皆無で、3時間に1回ぐらい震えが来ていて怖いんですが、今週・来週、8月上旬にかけてめげそうなのは、皆さんの顔と今日を思い出しながら自分に負けないで、どうにか放送

に漕ぎ着けたいと思います。(注2)

本当に今日はありがとうございました。

(大拍手)

(編集部・注1)

2007年8月5日放送、ハイビジョン特集「証言記録 マニラ市街戦／死者12万焦土への一ヶ月」20分

(編集部・注2)

8月22日(日) 22時～22:08分 NHK・BS1スペシャル「感染症に斃れた日本軍兵士／前編『マラリア 知られざる日米の攻防』・後編『破傷風ワクチン開発の闘い』」

贈賞式を終えて

今野 勉 会長

やっぱり、案の定、皆さんの話が面白くて長くて、だいぶ押しているようなので短く切り上げたいと思います。素直に言って受賞者の皆さんのひと言ひと言で、僕は60年以上もテレビで現場をやっているんですが、少し悲観的な声も聞こえてはいるんですが、僕自身はテレビをやっている面白さと思ってるんです。自分だけ面白く思っているのかと思っていれば、今日の受賞の皆さんの言葉を聞いて、「テレビは、そんなに捨てたもんじゃ無い」と思いました。皆さんが頑張っていることが分かっただけで、勇気を貰ったというか、感動しました。



短くすると言って、また、一つ話をします。最近ある出版の編集者から、伊丹十三さんは映画監督で有名だし、エッセイストでも有名

だけど、実はテレビマンだったということも誰も覚えていないんですが、今野さんは一番伊丹さんと仕事をして「その(誰も覚えていない)ことをどう思っていますか？」と聞かれてですね、ちよつと僕もドキッとしたんです。なんで、僕に聞くのか訊ねてみたら、僕より二回りぐらい若い世代のテレビと関係ある人もいるし、全く関係ない人もいますが、4～5人が偶然集まって、再放送かなんか見てたんだろと思うんですけど、テレビから語り掛けてくる変なオジさんがいるんで、それで調べて見たら、僕とずつと仕事をしていた伊丹十三さんと分かかって、僕に話を聞かしてくれて言ってきたんです。

ある日突然、若い人たちが何も知らないでテレビを見ていて、テレビから語り掛けてくるオジさんがいるってことが、もの凄く新鮮だったらしいんですね。つまり、伊丹さんって確かに視聴者に向かって、語り掛けてくるんですよね、その語り掛けることに命を燃やしているんですけども、どうやらこつちが考えていることが伝わるか、何を伝えたら良いかってということ。

語り掛けるという、テレビが一番持っている本質的な機能、働きなんですけど、そのことを伊丹さんは本能的に理解していて、どんな素材をやっても、「自分がどんな風に語りかけたら、見ている人がこちらの言うことを興味深く見てくれるか」と「何を伝えるか」が一緒になった表現方法が「語りかける」ことだと、改めて思い出させてくれたという話です。

それで伊丹さんとの番組をここ2～3か月ずっと見てるんですね。伊丹さんの語り口を確認するために、全部の語りを今、模写しているんです。手書きで活字に起こしているんです。そのうちに語りかける伊丹十三っていうのが分かるか……と。

今、はじめて分かかって、思い出したことがあるんです。伊丹さんは映画監督になる前に「テレビ的であることは映画的存在であることより面白い」と言っていて、僕はその言葉に励まされて一緒に仕事をしたいんですけども、そう言っていたくせに映画監督になっちゃったんですが、今皆さんの言葉を聞いて、もう一回「テレビ的であることは映画的存在であることより面白い」と言った彼の真意をちゃんと捕まえようと、あらためて決意したというか、そう言う皆さんの言葉でした。

そういう意味で、おめでとうと言う言葉と同時に、今日はどうもありがとうございます。ありがとうございました。(拍手)



※会場の写真 撮影は藤田裕久氏(会長)

放送人グランプリ2021(第20回)の投票番組&人の一覧

(ジャンル別・放送順・敬称略)

~~テレビ~~

◆グランプリ

☆ドキュメンタリー

NHKBS1スペシャル「レバノンからのSOS ～コロナ禍追いつめられるシリア難民～」

(7/12、22:00～、100分、D/撮影・編集：金本麻理子)

金本麻理子（ドキュメンタリスト、椿プロ・代表取締役。「レバノンからのSOS」ほか）。

NHKG・NHKスペシャル「アウシュビッツ 死者たちの告白」(8/16、撮影：柏瀬和之、D：吉岡英由紀、制作統括：花井利彦、制作著作：NHK)

NHKBS1「ワタシたちは ガイジンじゃない！」NHK名古屋 (12/29、制作統括：板垣淑子、三鬼一希、取材：植村優香、演出：川上 剛、脚本：宮藤官九郎、出演：イッセー尾形ほか)

読売テレビ「秘密のケンミンSHOW」(毎木曜・21時～、制作協力：ハウフルス、制作著作：読売テレビ)

NHKスペシャル「忘れられた戦後補償」

(8/15、59分。撮影：鈴木裕高、D：横里征二郎、山森英輔、酒井邦博、制作統括：三村忠史、制作著作：NHK)

ETV特集「基地の街にロックは流れて～嘉手納とコザの戦後史～」

(9/26、撮影：角文夫、D：奥秋聡、制作統括：小池幸太郎、東野真、制作著作：NHK沖縄)

ETV特集「引き裂かれた海～長崎・国営諫早湾干拓事業の中で～」

(6/13、取材：岩下宏元、D：吉崎健、制作統括：石田涼太郎、梅原勇樹、制作著作：NHK福岡)

映画「三島由紀夫VS東大全共闘 50年目の真実」(3/20～、劇場公開、108分。)

(D：豊島圭介、企画P：平野隆、P：竹内明、刀根鉄太、企画協力：小島英人、制作プロダクション：ツインズジャパン、配給：ギャガ、製作幹事：TBSテレビ、製作：映画「三島由紀夫VS東大全共闘」製作委員会。

TBS社内にあった討論映像80分。映画だがテレビが生んだ、優れてテレビ的工作としてグランプリに推したい。)

NHK東日本大震災プロジェクト (3.11の震災直後に組織横断的プロジェクトとして発足。被災地の復興支援を目指して、10年に渡り活動。『明日へつなげよう』『証言記録 東日本大震災』『ふるさとグングン！』『サンドイッチマンの東北酒場で逢いましょう』『未来への手紙』『大型イベント「公開復興サポート」』など。NHKの関連団体や制作プロダクションが参加。)

NHKEテレ「100分de名著」(水曜20:00～、25分。古今東西の名作を25分×4回の100分で読み解く。放送開始10年を迎える。2011年3月30日に番組はスタート。現在の司会は伊集院光、安倍みちこアナ、ゲストに専門家など。)

玉川 徹 (テレビ朝日コメンテーター、「そもそも総研」など)

羽鳥慎一 (フリー司会者、「羽鳥慎一モーニングショー」テレビ朝日)

池上 彰 (わかりやすい・ニュース解説を評価したい)

大越健介 (BS1スペシャル「独占告白 渡辺恒雄 戦後政治はこうして作られた 昭和編1/2」2020年3/7放送、50分前後編、及びその総集編「渡辺恒雄 戦争と政治～戦後日本の自画像」8/9放送、73分、におけるロングインタビューを讀えたい。)

特別功労賞:河野尚行(放送文化の向上に尽力)

特別賞:市村 元(「地方の時代映像祭」を長年にわたって支えたプロデューサーとして)

☆ドラマ

NHK・連続テレビ小説「エール」(新たな挑戦・ミュージカル、コロナ禍による2か月半の休止など)

テレビ東京・新春ドラマスペシャル「人生最高の贈りもの」

(1/4、20:00～。脚本:岡田恵和、演出:石橋冠、出演:石原さとみ、寺尾聰)

野木亜紀子(脚本家)

宮藤官九郎(脚本家、常にテレビドラマの世界に新風を吹き込む活動を評価)

☆バラエティー

NHKG「鶴瓶の家族に乾杯」または笑福亭鶴瓶。

BS日テレ「BS日本・こころの歌」

(毎月曜:19:00～19:54。“美しい日本の言葉” “美しい旋律”を次世代に歌い継ぐ。出演:FORESTA)

◆準グランプリ

☆ドキュメンタリー

テレビ朝日「羽鳥慎一モーニングショー」

橋本佳子取材による現代日本を描く一連のドキュメント

(NHKBS1、ドキュメンタリージャパン、「コロナに揺れる多国籍タウン～東京新大久保」20年7/25、
「豊洲市場 コロナ禍5か月」21年2/23、「双葉から遠く離れて、10年」21年3/7)

株式会社テムジン(中国を伝える優れたドキュメンタリーの制作。D:房満満、P:鐘川崇仁ほか、

BS1スペシャル「封鎖都市・武漢～76日間 市民の記録～」5/4、50分。

BS1スペシャル「中国コロナ危機 絶望のトラックドライバー」6/14、50分。

BS1スペシャル シリーズコロナ危機「生活崩壊を防げるか ～脅かされる“仕事”と“住まい”～」8/9、50分。

ETV特集「エリザベス この世界に愛を」1/23、59分、難民支援のナイジェリア人。

BS1スペシャル「黒人中国夢 ブラックチャイナ・ドリーム」2/23、49分。)

鎌倉千秋(NHKアナ。BS1スペシャル「激動の世界をゆく」のキャスター・現場取材と報告、インタビューなど。

「巨龍・中国と向き合う～香港・台湾 迫られる選択～」19年12/22。

「韓国、“隣人の素顔”を探して」5/3。「巨龍・中国が変えゆく世界 “ポストコロナ”を迎える市民は」7/23。

「分断の先に“トランプ後”のアメリカ」1/29。)

☆ドラマ

東海テレビ・オトナの土ドラ「その女、ジルバ」(21年1/9、土曜23:40～、全10回、出演:池脇千鶴、中尾ミエ、草笛光子、
企画:市野直親、原作:有間しのぶ、脚本:吉田紀子、制作:東海テレビ、テレパック。)

◆優秀賞

☆ドキュメンタリー

鹿児島テレビ「テレビで会えない芸人」

(20年5月、制作:野元俊英、P:四元良隆、D:牧 祐樹、芸人・松元ヒロを19年の春より取材。)

テレビトクシマ「子どもの声が聞こえる～伊座利の 365 日～」

(山村留学制度を活かした村の1年間の記録、2019年8月放送、60分。制作統括：中山哲也、構成・演出：大下広、撮影/編集：宮本あゆみ、撮影：清重和生、ナレーター：大上すずよ、制作著作：テレビトクシマ、『4K・VR徳島映画祭2019』一般部門・大賞受賞作。)

ETV特集「原発事故“最悪のシナリオ”～その時誰が命を懸けるのか」の製作スタッフ

(3/6、23:00～、89分。語り：渡邊佐和子、リサーチャー：早崎宏司、松山果包、D：青山浩平、石原大史、池座雅光、制作統括：梅原勇樹、矢吹寿秀。原発事故の根幹を追及、よく分かる『日本が駄目な理由』を提示。)

NHKスペシャル「調査報告“除染マナー”私と故郷と原発事故」の制作スタッフ

(3/10、49分。語り：山根基世、取材：横井悠、吉田敬市、中村拓斗、金澤隆秀、森永竜介、D：石濱陵、中村優樹、制作統括：旗手啓介、鹿野恵功、野津原有三、鈴木高晴。不正まみれの公共事業・頑張り調査報道。)

☆ドラマ

NHKスペシャル・ドラマ「星影のワルツ」の出演者たちと制作スタッフ

(3/7、59分。出演：遠藤憲一、菊池桃子、川栄李奈ほか、脚本：峰尾賢人、大石みちこ、取材：木村修、大西望、D：川上剛、P：中澤陽子、吉川恵美子、制作統括：新延明。津波で福島沖を、自宅の屋根に乗り43時間漂流。)

◆企画賞

☆ドキュメンタリー

BS-TBS「関口宏の もう一度！近現代史」

(土：12:00～、54分。出演：関口宏、保阪正康、19年10月～。制作協力：ゴッズダイナミックワールド、制作P：平賀渉、P：後藤史郎、別所時彦、D：世良史朗、岩井俊幸、田口悦子、製作著作：BS-TBS)

NHKBS「ヒューマニエンス ～40億年のたくらみ～」の企画制作スタッフ・(株)スローハンド

(2020年10月より・毎木曜、20:00～、59分。司会：織田裕二、藤井彩子アナ、「人間」絞ったサイエンスバラエティ。)

NHKEテレ「世界にいいね！つぶやき英語」(木：22:55～、25分。MC：太田光ほか、各回ゲスト。)

世界中で発信されるSNSの英語を素材に、世界的なニュースを太田光の毒舌をスパイスに読み解く英語情報番組。)

◆奨励賞

☆ドラマ

磯山晶 (TBS、ドラマのプロデューサーとして、宮藤官九郎や大石静の起用で優れたドラマを制作)

～～ラジオ～～

◆グランプリ

☆ドキュメンタリー

南海放送ラジオ特別報道番組「感染—正義とは何か—」

(5/30、14:00～、44分、D/取材：植田竜一、取材：中武正和、ナレ：永野彰子)

DJ. 村上春樹

TokyoFM「村上RADIO ステイホームスペシャル～明るい明日を迎えるための音楽～」

(5/22、22:00～22:55、23:00～23:55、延江ゼネラルP)

TokyoFM「村上RADIO 年越しスペシャル～牛坂 21～」(12/31、23:00～25:00、京都からの生放送)

増山麗央 (TokyoFM特別番組「Positive～コロナとホテルとラインチャット」11/15、19:00～、56分。)

P：増山麗央、ゼネラルP：延江浩、D：伏見哲也、構成：西澤史郎、演出補：伊藤慎太郎、ドラマ脚本：小川哲、出演：藤間爽子、辻しのぶ、山崎一、玉置玲央、インタビュー取材：大曲貴夫、水無田気流、マンタ (増山麗央)、

2020 年文化庁芸術祭・ラジオ部門ドラマの部・優秀賞受賞。

コロナ感染でホテルに隔離された陽性患者たちのLINEチャット（匿名）を元にしたドキュメンタリードラマ。）

文化放送「戦後 75 年企画シリーズ～封印された真実」編成・制作スタッフ（年間 6 回。

3/28「BC級戦犯～翻弄された人生」57 分、8/15「軍属ラジオ」、12/29「ホロコースト零地点～私は生き延びた」、12/30「あなたの故郷はどこですか？」（出演：寒河江正）、12/30「3万 6000 人の捕虜」)

文化放送「戦後 75 年スペシャル アーサー・ビナード 玉音放送を探して」

(8/15、11:00～、120 分生放送、玉音放送とは何だったのかを掘り下げる。)

◆特別賞

村上春樹（TokyoFM「村上RADIO ステイホームスペシャル～明るい明日を迎えるための音楽～」5/22 に対して）

きたやま おさむ（TokyoFM 開局 50 周年記念番組「True Stories」毎日曜 18:00～、55 分。

5/24&31 放送の『きたやまおさむ』。春の青山を歩きながら自身の原点を振りかえり人生を語る・哲学的な番組。)

アーサー・ビナード（詩人、翻訳家、絵本作家。太平洋戦争を後世に伝えるために日本各地取材し放送。)

秋山和平（1935 年生まれ 85 歳。NHKラジオ第2「私の日本語辞典」の構成・ゲストの人選・インタビューを一人で担当。

NHK放送研修センター日本語センターの現役アナウンサー。

番組では幅広い分野のゲストを迎え「ことば」に関わる話題を 30 分×4回で深く掘り下げる。

92 年 5 月より 20 年 7 月まで 383 人のゲストをインタビュー。

NHKの経営計画では、ラジオ第2を停止する方針を示したが、制作環境の悪い中、地道に番組を作る制作者を励ますためにも、その象徴の秋山和平アナにスポットを当てたい。)

「放送人の証言」収録プロジェクト
からの近況報告

収録プロジェクトチーフ 工藤英博

前期は予定していた中尾幸男氏、橋本佳子氏、曾根英二氏、長山節子氏、菅原正豊氏の収録を終えた。広告代理店、制作プロダクション、民放地方局、NHKと幅広く多様な立場から貴重な証言を頂いた。

厳しい状況を縫いながら困難な作業を成し遂げて、結果を残した各担当の矢島良彰さん、吉田賢策さん、戸田桂太さん、柏木登さんの努力に心から敬意を表したい。

今期は予定の収録活動をコロナ禍のために見合わせてきたが、WOWOW前会長の和崎信哉氏が6月末で退任し、すべて京都に軸足を移されることになり、急遽、感染対策の行き届いた本社応接室をお借りして収録を済ませた。NHK・民放（有料放送）双方の経営とメディア戦略に通じ、ソフトとハード両面を熟知された得難い証言となった。和崎氏と長年に亘って親交があり、聞き手を務めた鈴木嘉一さんにはこの収録で終始多くのお力添えを頂いた。

和崎信哉氏が2006人目の証言者となったが、今後は放送の新たな発展や成熟に寄与した対象者を、新しい出発点に立った意識で人選に当たりたい。そして、「放送人グランプリ」と連携してその受賞者や、我々の前回の会議で検討されたアニメ分野など広範囲に対象者を求めていきたい。

証言者が当初の目標である200人に到達したことで、支えて頂いている「放送文化基金」による見直しがあった。従来の助成金や減額されたが、今後は賛助金としてこの文化事業に引き続き支援を頂くことになったのは有難い限りである。

事務局長担当になりました

深尾隆一

事務局長を引き受けることになった。会の活動の全貌を把握出来る立場であり、中々面白いと思っている。

事務局の最大の課題は人手不足ということ。今放送人の会は会員数の激減に晒されている。結果として会費収入の減少と人手不足が問題となる。いずれも深刻だ。減収はさておき人手不足により一人当たりの作業負担が増える傾向にある。主な事業を中心に、会の活動のかなりの部分はそれぞれの担当が担っているが、現実的には事務局員の関与する作業が多いのだ。特にフットワークを要する業務には実際に動ける若手が欲しい。

その一方、コロナ禍で事業は滞りがちである。一堂に会して意見交換をする機会もめっきりと減り、意思の疎通が難しくなっている。多くのことがメールや郵便などの通信手段で行われる。事業が少なくなると作業量が減るかと思いきや、ハブである事務局の役割はむしろ増える。

会員は従業員ではないから、報酬のために動くわけではない。逆に会費を納めているから、その見返りを求める権利があると言える。ところがそのサービスを提供する事務局スタッフも、須藤さんを除き全てボランティアなのである。

会の運営は各担当者がそれぞれの経験と能力を生かして貢献する、ということであり立っている。誰かに命乞いされてではない。そこに何らかの意義を見出し、「面白さを感じてのこと」と思う。

新会員の獲得にあたってパンフレットを更新する作業が開始されている。そこでは各自が感じている面白さを前面に出し、「私ならこ

れで貢献出来そうだ」とか「このイベントは私ならもつと面白く出来そうだ」と思ってもらえるようなものになりたい。そう総務連絡会で話し合っている。

私自身は、入会当初「日韓中テレビ製作者フォーラム」に参加出来ることに最も魅力を感じた。実際東京、韓国、中国の興義の三回にスタッフとして参加したが、期待以上の面白さを感じた。

それがなくなった今は「放送人の証言 出版プロジェクト」に力を注ぎ、「放送人グランプリ」の魅力も捨てがたいと思つて深くかみこんでいる。

各自が感じている放送人の会の面白さ・魅力を大いに発信して、共感する若手が次々に入会するよう努力して行きたい。

総務委員長新任のご挨拶

小川 和之

放送人の会、会員の皆様 コロナ禍で日常の暮らしが制限される中、ご息災にお過ごしのことと拝察いたします。

この度、総務委員長を拝命しました小川和之です。本来であれば、直接お会いしてご挨拶申し上げるべきところ、自己紹介を兼ねまして紙面にて失礼させて頂きます。

出身母体はNHK、報道局を中心にプロデューサーとしてニュースや番組制作に関わってきました。その間、電通とNHKが設立した総合ビジョンや、その後の地デジやデジタルラジオの推進協会に出向、民放各局の皆様とは大変親しくさせて頂いてきました。

NHK退職後も、外資系の製作会社に属していますが、この2年間、前任の総務委員長の下で委員を務めさせて頂きました。時間的制約もあり未熟ではありますが、与えられた役

割はしっかり果たして参る所存です。

今後共にご支援、協力のほど宜しくお願い致します。

コロナ禍のこと

秋田和典

ラジオ局で番組制作に携わって45年以上になるが、昨年から今年にかけての出来事は初めての経験だった。地元でさまざまな活動をしている方に話を聞くというインタビュ番組は、出演者がスタジオ入りから電話出演に変わった。イベントやライブのスケジュールはすべて予定という表現になった。

新しい映画情報を得るために、試写の案内が届くと試写室に出かけていたが、あつという間にオンライン試写に切り替わった。映画は劇場で観るものという考えの私にはPC画面を通しての映画はどうもなじめない。(最近ようやく試写室での上映は再開されたが)

そんな折に名古屋では、名古屋城のシンボルの金シャチが地上に降ろされ、今年の四月からおよそ3ヶ月展示された。疫病の退散を願いつつ街を元気にしようという企画だったが、金シャチとの記念写真が撮れるということではなかなかの人氣だったそうだ。

先日、三重県在住の映画評論家吉村英夫さんから小冊子が届いた。吉村さんは長年映画監督の小津安二郎について研究している方だ。小津監督は映画監督になる前の青春時代を父親の故郷である三重県で過ごしている。今回は小津監督の「戸田家の兄妹」(1941年製作)についての考察だった。この映画は、資産家の当主が没落し遺された母親が子供たちの家をたらいまわしにされるという話であるが、

これまでは小津家(父方)の没落の反映とも考えられていた。吉村さんの調べによると、小津監督の母方のルーツにも同じように家の没落の事情があり、このことも作品に影響しているのではないかとのことだった。こういうときにもコソコソとやり続けることの大切さを教えられる話題だった。

妹は「コン」という

大類 なぎさ

妹の名前は「コン」という。父が名付けた。この「コン」という名前は、ベトナムのボブディランと呼ばれた、詩人であり作曲家でもある、チン・コン・ソン(1939~2001)の「コン」からとっている。

1973年、父は戦乱のインドシナ3国(ベトナム、ラオス、カンボジア)を約1ヶ月に渡って取材をした。妹は母のお腹の中、私が2歳の時である。

ベトナムを取材していた時、父の単独会見に応じてくれたのが、ソン氏だった。

彼との会見が叶えられた喜びと、この日に見たメコン川に沈む夕日の美しさが忘れられず、妹は「コン」となった。

当時のソン氏は、作曲した歌が反戦的・厭戦的だと南ベトナム政府に睨まれ、歌は発禁処分、次に次ぐ発禁。さらに徴兵の拒否で逮捕・投獄を繰り返し、常に警察の監視下にあった。

ソン氏が作った歌の1つに、「坊や大きくなれないで」という歌がある。

この歌は1960年代末から1970年代初めにかけてベトナム反戦運動を背景に世界中で歌われた。ベトナムではソン氏とコンビを組み「サイゴンの歌姫」と呼ばれたカン・リーさんが歌い、日本では高石友也さんや加藤

登紀子さん、森山良子さんたちが大学のキャンパスやベトナム反戦集会で歌っていたという。

普通の親ならば、「早く大きくなって」と、我が子の成長を願うがこの歌は、「大きくなれば戦争に行かなければならない。だから大きくならないで」と訴えた、とても衝撃的な歌だ。

今夏、メディアは東京五輪 広島・長崎原爆の日、新型コロナウイルスの爆発的感染拡大を同時に報道した。

五輪の参加選手たちの応援に盛り上がりつつよいものか、原爆死没者を悼み、核兵器廃絶を訴えるべきなのか、コロナの感染爆発で自粛をするべきなのか、正直困惑する夏だった。

その一方で、妹の名前を呼ぶ度に「俺の原稿はどうなった？」と父に嫌味を言われているようで、チクチクと胸が痛んだ。

コロナ禍で今夏も故郷に帰省できず、父の墓参りを断念。メダルラッシュの映像を横目に、「戦争は俺の生涯の課題だ」と遺していった父の原稿を、ひたすら整理していた。

そして、奈落に墜ちた、が…

小河原正己

「万葉集」なるお堅い本など、それまで一度として読んだことがなかった私が、NHK「日めくり万葉集」の制作を頼まれ、何の因果か引き受ける羽目になった。ところが、初対面で万葉集に一目惚れ、老いらくの恋に落ちた。それから十年余の波乱万丈の物語は、まるで三幕ものの舞台劇のようだった。

放送が終わってからも、魔性の女から離れられなくなった如く(女性に対しては経験ないが)、「万葉集巨伝係」を自称して活動、挙句の果ては無謀にも万葉集の舞台化にチャレン

ジ。二〇一三年、一四年に万葉故地の高岡市で、私の初めての脚本で音楽朗読劇を上演するまだが、第一幕

一九年には、大伴家持生誕一二〇〇年を記念して、鳥取市の大ホールで公演、和泉元彌熱演の舞台に、「お芝居の神様」が舞い降りてきてくれたのだ、それも万葉の神様を追連れに。そう、それから三週間後、万葉集由来の新元号「令和」が発表されるまでが、第二幕

そして、第三幕「素人が興行に手を出す」と大火傷をする」の場、降ってわいたような万葉集ブームが起き、千載一遇の好機到来。絶対無理と思っていた東京公演のチャンスに、憑りつかれたように浅草公会堂を予約。公演日は、二〇年八月、昼夜二部で二日四回公演

素人興行師、慣れぬ興行に悪戦苦闘しながらも、公演半年前には、脚本の第一稿を上げ、予告チラシ二〇〇枚を関係方面に配り始め、同時に先行予約の受付を始めると瞬く間に一〇〇枚を超えた。

「いいスタートが切れそうだ」と思った、そんな矢先、寝耳に水、一通のメールが飛び込んできた。パートナーのプロデューサーから、「自爆デロと思われるかも」という「降板」の通告だった。直ちに慰留したのだが、私の人徳のなさ、金力のなさを見限られたのか、翻意ならず、舞台制作の片翼を失って奈落に墜ちた。やむなく公演の中止という苦渋の決断、諺通り火傷を負った。

ところが、この直後から世の中の舞台が全て暗転、未曾有の災禍が進行していることが明らかに。言わずと知れた、コロナ禍だ。プロのイベントが苦境に陥る中、ド素人が、その魔物の餌食にならずにすんだのも、お芝居の神様の天恵が、はたまた悪運か。

いや、天恵だとしたら、誰あろう、あの降板したパートナーのおかげだった。

「不幸中の幸い」という、いかにも劇的な展開ではあるが、こんな安直な脚本、私でさえ書かない。気まぐれなお芝居の神様のひと時の夢舞台だったのだろう。

詳細については、「地球ことば村」HPで連載中の「万葉集ナウ」を、覧あれ。

今やテレワーク時代！

荻野慶人

新型コロナウイルス・パンデミックの昨今、オンライン会議とかリモート授業などというテレワークが珍しくなくなった。

今野勉当会会長が昨年文化功労者に輝いた際に賛辞として語らして頂いたが、一九七〇大阪万博の電気通信館（電電公社）で、今野さんや萩元晴彦さん故人が企画されたプランを澤田隆治さん（本年5月16日永眠）や僕たちが阪ダイレクターがショーアップした三角広場が、その原型だったと言っている。

TBSの「サンデーモーニング」（関口宏さん司会のスポーツコーナーで担当の張本勲さんが、時に地方からリモートで参加する際、恰も同じテーブルを囲む対談に見せようと台成を試みて、視線など違和感だらけは観るに堪えなかったが、コロナ報道ではどの番組も遠く離れた地区から顔縁内の医療従事者やコメンテーターが図解を駆使してカメラ目線で極其自然に論議を展開している。

50年を経て想い出す。電気通信館のワイドスクリーンに映る種子島の埠頭から投げられたザボンが、直接広場に飛んできても会場は苦笑、ただだが、東京の霞が関ビル前から呼びかけて北海道網走の原生花園を行く旅人と対話が始まると、広場の観衆は固唾を飲んだ。この度の感染症蔓延の危機はTV報道の演

出にもかんりの変革をもたらした。現役を退いた補聴器頼りの後期高齢者も、朝から晩まで画面を観ているだけで面白い。

ジャーナリスト教育

木下浩一

日本の政治や行政の醜態を、コロナ禍は我々にまざまざと見せつけている。国民も無謬ではない。少なくとも有権者として、政治的リーダーを選んできた。そしてこれからも、変わらず選び続けることだろう。

もうひとつ見えてきたのは、日本のジャーナリズムのだらしないさだ。数年前から「ファクトチェック」という言葉がもてはやされているが、いったいどこでなされているのか。不易流行という言葉もあるが、流行はあつても不易はないように思うが気のせいかな。

考えてみると、ほぼすべてのジャーナリストは、日本の高等教育を受けた後にジャーナリストになっている。だとすると大学あるいは大学院における教育も、無関係ではられない。ジャーナリズムを広く教えるのが「ジャーナリズム教育」、ジャーナリストを養成するのが「ジャーナリスト教育」とするならば、日本の大学と大学院は、これまでどのようなジャーナリズム教育やジャーナリスト教育を行なってきたのか。それらの教育によって、どのような有権者や主権者を育て、どのようなジャーナリストを養成してきたのか。

古い分類ではあるが、教育は、家庭教育と学校教育と社会教育に分けられるという。家庭という私的領域への介入は容易ではない。日本における社会教育は伝統的に会社などの勤務先が担ってきたが、非正規労働者がこれほどまでに増えた現状では、社会教育も低調である。残るは学校教育のみ。

日本の大学や大学院は、優れたジャーナリストを養成できるのか。優れた主権者を育てることができるのか。私はいま大学に奉職していますが、以上がコロナ禍において前景化してきた問題意識です。

漂流民の会結成二十周年

木村成忠

私が会長をつとめている「石巻若宮丸漂流民の会」が十二月結成二十周年を迎える。約二三〇年前ロシアに漂着し、十一年後帰国した石巻の船乗りたちを顕彰している会である。

会員は地元宮城県が主だが全国に約九十名いる。毎年三月に開催している総会には、コロナ禍で去年は中止せざるを得なくなり、その反省から今年はオンライン総会を試みた。それと併せてこの漂流民ゆかりのロシア・イルクーツク、アラスカ・フェアバンクス、漂流民上陸の地ブラジル・サンタカタリーナ、三重県鈴鹿市の大黒屋光太夫顕彰会、函館日口交流研究会を結びオンラインサミットを行った。

石巻若宮丸漂流民をかいつまんで紹介すると次のようになる。

寛政五（一七九三）年、仙台領石巻から米と用木を積んで江戸に向かった千石船若宮丸が、現在の福島県磐城沖で嵐に巻き込まれ遭難、乗組員十六人は厳冬の海を半年間も漂流し、北太平洋のロシア領の島に漂着する。そこで原住民に保護され、ロシア人に引き渡される。一行はその後東シベリアの町イルクーツクに移送され、異郷の地でそれぞれが教習な運命をたどることになる。遭難から十一年後の文化元（一八〇四）年一艘のロシア船が長崎に現れた。船にはロシアから送還されてきた四人の若宮丸漂流民が乗っていた。この四人は日本に戻ってきたことで、初めて世界一周した

日本人となった。この漂流体験を仙台藩の蘭学者大槻玄沢が聴取し、『環海異聞』全十五巻にまとめ、藩主伊達周宗公に献上した。・・・

石巻出身の私は、この地球規模の郷土史に強く惹かれ調べ始めてから、三十八年になる。

東北放送在任中は二度ラジオドキュメンタリーを制作している。一九八四年はいわば国内編一九九五年にはロシア・サンクトペテルブルグなどを取材した海外編である。テレビ番組も企画したが製作費が膨れ上がり実現できなかった。映像化は私の悲願だったが、ここに来て、漂流民の故郷のひとつ塩釜市にあるケーブルテレビ局が開局三十周年記念番組として制作、私も出演した。また宮城県にある某局も開局周年記念として企画、わが会にも協力を要請が来ている。だが、いざ取材に着手しようという時にこのコロナ騒動。ロシア取材の予定がまったく組めないという。周年が過ぎたので企画流れにならないことを願う。(仙台市在住)

2021年の夏

清水誠

1年半のStay Home生活で足腰ばかりか脳みそまでが衰えた。そんな2021年の夏、五輪は1年遅れで開催された。振り返れば1964年10月、自分は小学校6年生だった。講堂に置かれた観音扉付きの小さな白黒テレビの前に全校児童が集められ「東京オリンピック」を観戦した。が、遠すぎて映像も音声も届かなかった。あれから56年、2度目の東京五輪に立ち会えるなんて思ってもみなかった。早々と大画面テレビを用意し万全な態勢で待ち望んでいたが、まさかの1年延期。思えば新型コロナに限らずエンブレム問題、競技場の設計変更、膨らむ予算、猛暑対策、関係者の交代劇、開会式の直前まで呆れるほどの混乱が続いた。

選手達には次々現れる不安とも戦わなくてはならない長く辛い1年だったに違いない。その間もメンタルを維持しトレーニングに励んできた選手達のことを考えるとコロナ禍で飲みに行けないと嘆く自分が恥ずかしくなる。

そして、ついに東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会は開幕した。無観客になったため誰もがテレビ中継に期待することになったが、ルールも知らない新種目のスケートボードやサーフィン、ボルダリングなどでは間近で迫力ある映像と親しみやすい解説を届けてくれた。10代のメダリストが続々と誕生し屈託のない笑顔を映し出す一方、メダルには届かなかったものの全力を出し切った選手の大粒の涙に思わずもらい泣き。

スポーツには感動がつきものであるが、特にパラリンピックは驚きと発見の連続となった。初めて見た車いすラグビーやバスケットは俊敏な動きと激しいぶつかり合いで選手が怪我をしないかハラハラさせられた。ブラインドサッカーではボールの中の鈴の音を頼りにゴールめがけてシュートするわけだが、まるでボールが見えているかのような超人技である。以前、ダイアログ・イン・ザ・ダークというイベントで自分も体験したことがあるが、暗闇の中、パスされたボールを蹴り返すだけなのに空振りばかりで何も出来なかった。

学生時代は陸上部に所属していたが、社会人になってからスポーツとは無縁の生活をしてきたこともあり運動能力は衰え、今では走るどころか散歩の途中でつまずく始末である。これも老いによる後天的な障害だと思ってきたがパラリンピック選手を見て考え直した。ハンディキャップをものともせず自信を持って主力で闘う姿に感動。誰にも弱点はある、それを補うために様々な工夫と練習を繰り返している。そつだ、今からでも遅くない、自

分も運動を始めよう。そんな気にさせてくれたオリ・パラとテレビに感謝しています。*****

終戦特集を見て

菅野高至

幾つかの力作を拝見した。

今の中国が分かる秀逸なドキュメンタリーがあった。8月23日(月) 22:00~23:00分 BS1スぺシャル「中国共産党100周年」紅蓮伝子の継承。語り…小田切千、撮影…胡丹、D…木下富夫、制作統括…鈴木伸元、奥谷龍太、制作著作…NHK。湖南省の貧しい村と裕福な村、共産党の2つの地方支部の幹部を対比しながら、共産党一党支配下の今を描く。紅軍の長征で生まれた物語「半分の布団」で豊かになり続ける「沙洲村」。そこから、30キロ離れた貧しい「官亭村」では「一枚の借用書」で観光地化を図るが人は誰も来ない。一党支配のものの上意下達、その悲喜劇。一党支配の正当性が必要な共産党にとって、沙洲村は格好の宣伝教育媒体になり、共産党100周年のツアーに組み込まれ、半年で100万人が村を訪れる。「布団」も商品化され、投資会社が「政治こそ利益になるとアトラクション施設『紅い要塞』」の建設を目論む。奇妙なおかしみがある一方で、人間はこうにもなるのだと自覚させられる怖い作品だった。

今年の「グランプリ大賞」を受賞した金本麻理子さんの力作。BS1スぺシャル「感染症に斃れた日本軍兵士」前編「マリア 知られざる日米の攻防」・後編「破傷風ワクチン開発の闘い」8月23日(月) 22:00~23:00分。語り…松重豊、取材…原田歩実、石井佳美、D…撮影…金本麻理子、制作統括…東野真、塩田純、制作…NHKエデュケーショナル、制作著作…NHK、椿プロ。インド

ネシア・ジャワ島のバンドンの南方軍防疫給水部(2)部隊から流れた」で行われた、破傷風ワクチン開発での人体実験を調べていく。不活性化が不十分のまま、現地の人々(動員されたロウムシヤ)に人に接種。8人が死亡した。陸軍は実験を隠すため冤罪を仕組む。ジャカルタのエイクマン研究所の研究者3人が逮捕され、所長のモホルタル医師がひとり自白、罪を背負って斬首される。敗戦後、防疫給水部の研究員は何も語らない。「真相究明はまだ続く」とエイクマン研究所のケビン・ベアードに語らせて、力作は終わる。

重い直球に頭が垂れる、秀作を見た。ドキュメンタリー解放区#0「李鶴来(イ・ハンホ) 不条理と闘った男」8月25日(日) 22:00、23:00分。2021年3月下旬に亡くなった、最後の朝鮮人BC級戦犯者の半生と想いを描く。2000年11月25日の「最後のインタビュー」をベースに、妻の姜福順も語るが、その想い深い。取材…宮本晴代、川淵聡美、両坂省吾、岸将之、取材・ナレーション…日下部正樹、P…藤井和史、松原由香、制作著作…TBS。

本気で中国共産党が作った「建国を祝う作り物の映像」が凄い。映像の世紀プレミアム「第20集 中国・革命の血と涙」8月14日(土) 23:00分。語り…山田孝之、山根基世、取材…池上敦子、羽山夏子、D…小柳ちひろ、P…鐘川崇仁、制作統括…寺園慎一、伊川義和、制作協力…テムジン、制作…NEP、制作著作…NHK。

鍾がもう一つ下りていないと感じた。NHKGの終戦ドラマ「しかたなかった」と言っただけです。制作著作…NHK名古屋・大阪、8月13日(金) 21:00分。原案…九州大学生体解剖事件70年目の真実 熊野以

素 脚本…古川健、D…田中正、P…増田静雄、CP…三鬼一希、熊野律時、出演…妻夫木聡ほか。「尸方の肺でどれだけ生きられるか？」の実験手術、教授は自殺、助教授が首謀者となる。「人間の命に対して、しかたなかったと言っているはいかんです」と記者に言う。俳優の演じている感が最後までつきまとう。なお、古川健は劇団チヨコレートケーキの劇作家・俳優で、社会的モチーフの芝居を作り続けている。この7月には大逆事件を扱った「一九一一」を再演した。

8月に限らず、他のテーマで、幾つかを。YouTubeで見たHBC北海道放送の作品。

原発ゴミの秀作。タイトルが良い。HBCテレビ「今日ドキッ！報道スペシャル『ネアンデルタール人は核の夢を見るか』高レベル放射性廃棄物の行方」5月28日(土)5分。核の処分場に立候補した寿都町(すつちよう)町長、突然の立候補への波紋を描く。6年間で8億の交付金が貰って最後まででは行かない、と主張。取材…藤田忠士、幾島奈央、長沢祐、D…澤出梨江、P…山崎裕樹、制作著作…HBC北海道放送。

ETV特集「孤独死を越えて」6月19日(土)、孤独死の現場をミニチュアで再現する特殊清掃員・小島(27)を通して、孤独死の現況を描く。人を助けることで自分も救われる。撮影…井手口大騎タグラス、高野大樹、取材…金善、D…佐藤雅俊、制作統括…矢吹寿秀、森博明、藤田英世、本木敦子、制作…NED、制作著作…NHK、ドキュメンタリージャパン。

取材相手に寄り添う・小さな秀作があった。NNNDドキュメントⅡ「ほころぶ性暴力の被害者 それぞれの一步」7月25日(日)24分。撮影…語り・D…森葉月、P…吹上直裕、制作著作…中京テレビ。大学

4年のかや子(仮名)さんを通して、性暴力被害者がつらい記憶から一歩踏み出せるのは、どんな支えがあったときなのかを描いてゆく。番組のラスト、『ポジティブでないとやってられないから、強く見せているの』とかや子さんに言われ、森Dは、「そのもの(強く見せていること)が性被害だと分かった」と語る。

「さよならテレビ」の真意

鈴木嘉一

今の民放テレビ界を代表するドキュメンタリストは誰かと問われたら、私は迷わずこの2人を挙げる。ディレクターなら、「ふたりの桃源郷」シリーズなどで日本放送文化大賞(日本民間放送連盟主催)のグランプリを三たび受賞した山口放送の佐々木聰さん、プロデューサーでは東海テレビのドキュメンタリーとその映画化を牽引する阿武野勝彦さんだ。

放送人の会は「約束『日本一』のダムが奪うもの」と「裁判長のお弁当」を評価して、阿武野さんにいち早く「放送人グランプリ2008」を贈った。日本記者クラブ賞や芸術選奨文部科学大臣賞、放送文化基金賞の個人賞などに先駆けて選考した当委員の眼力は、胸を張っている。

阿武野さんは6月、初の単著となる「さよならテレビ ドキュメンタリーを撮るといこと」(平凡社新書)を出した。「さよならテレビ」というタイトルは、2020年に劇場公開された作品から取った。「人生フルーツ」などでヒットを飛ばし、菊池寛賞に輝いた「東海テレビドキュメンタリー劇場」の12作目だ。大阪の暴力団に密着取材した「ヤクザと憲法」の土方宏史監督が自局の内側にカメラを向け、報

道現場を撮り続けた。ローカル放送の段階から、局内では「そこまで出すのか。会社のイメージダウンになる」と激しい反発を浴びる一方、「テレビの自画像」とも言える異色作として全国的な話題を集めた。

本書のタイトルは意味深長だ。テレビに「さよなら」を告げるのは誰だろう。テレビ離れをしている視聴者なのか、それとも還暦を過ぎた阿武野さん自身なのか。あるいは、旧態依然たるこれまでのテレビへの訣別宣言なのか。

ディレクター、プロデューサーとして作ってきた作品に即したこの体験的ドキュメンタリー論を一気に読んで、題名の真意がつかめたような気がする。

たとえば、「さよならテレビ」の映画化について、経営陣のトップの同意を得る場面はこう書かれている。

「あぶちゃん、東海テレビに愛はあるのかい？」

「もちろんです。気持ちがなければ、こんな番組は作れません」

「わかった」

場合によっては激しい言葉を交わした上層部とのやり取りも率直に書いた。メディアの世界における組織と個人のあり方、著者がいう「テレビの内部的自由」も考えさせる。

阿武野さんはテレビドキュメンタリーの復興をめざして、果敢な取り組みを続けてきた。本書では、メディアの固定観念やタブー、横並び意識にとらわれない発想や視点、方法論を具体的に明かしている。さらに、精魂かけた番組と信頼しているスタッフを守るために、局の番組審議会やキー局のフジテレビなどにも言うべきことをはっきり言う姿も浮かび上がる。仲代達矢や樹木希林らの出演者をはじめとして、生き生きとした人物描写や会話、個人対個人の交流、番組制作の印象深いエピソード

などからは、テレビと番組作りを心から愛している様子が伝わってくる。

「子どものような気持ちで挑戦し、迷い、苦しみ、もがき、そして腹が振れるほど必死になつて番組制作に熱量を込め続けるしかない。(中略)『テレビの神様』は、組織の前に現れるのではなく、作り手それぞれの前に現れる。テレビマンの多くが、『テレビの神様』を信じるようになった時、『やっぱり、テレビは面白い』、人々はそう思うのかも知れない。」

静岡県の日蓮宗寺院で生まれ育ち、キリスト教系の同志社大学を出た好漢が「テレビの神様」を信じているところも面白い。

その非凡さは、作品のユニークなタイトルにも発揮されている。かつて体罰事件を起こし、大きなパッシングを受けた戸塚宏校長の戸塚ヨットスクールが、再び必要とされている現代社会のジレンマをあぶり出す映画の第1作に「平成ジレンマ」(2011年)とつけ、感心させられた。同じく映画化された「死刑弁護人」や「ホームレス理事長く退学球児再生計画」もなかなかうまい。

本人は「タイトルは、戒名に似ている」と書いている。自分のことを語る際は、できるだけ客観的であろうと努めているせいか、そこはかとないユーモアを漂わせるのも、この人のキャラクターと本書の魅力だろう。

映画の公開初日には、監督を務めたディレクターと一緒に舞台あいさつを欠かさず、講演やシンポジウム、対談、執筆などの依頼にも積極的に応じているようだ。これらの社外活動は東海テレビの取り組みを社会的にアピールするだけではなく、さまざまな他者と出会い、自分自身を鍛える機会でもある。また、民放の系列を超えて、地方局のドキュメンタリストから映画化の相談を受けると、親身に応じている。こうした開かれた姿勢は、「平成ジ

レンマ」や「約束く名張毒ぶどう酒事件 死刑囚の生涯」などで名コンビを組み、報道部長を務めた齊藤潤一さん、土方ディレクターらの後輩も見習っているに違いない。

「優れた作り手は筆も立ち、弁も立つ」というのは私の持論だが、阿武野さんもその1人と確信している

2021年夏の記憶

曾根英二

さすがの猛暑もようやく緩んで秋の虫が鳴くようになった。散歩に出る人もいる。「まるで人ごとのように報じてるわね」と奥さん数人の話し声が我が家の前を通り抜けた。コロナ禍2回目の市民たちの夏はこんなセンチメン스에代表されるなと思った。みんなイライラしている。

メディアが宙ぶらりんの報道や忖度を相変わらずやっている。今一番何が求められているのか、つぶさに見せて欲しい、報じて欲しい。何が現実なのか。テレビの画面にパワーポイントを並べて予定稿の消化や解説はもう結構という市民の声なのかもしれない。

靴の上から足を搔いている感覚がぬぐえない。いま進行している現場の真実を視聴者が見落として行くことにならないか。

コロナのワクチン接種がどこおっている。私など地方に住む高齢者は7月に2本目を終えたが、首都圏に住む3、40代は1本目をようやく終えたところだと言う。

もう一つ流動化したアフガン情勢を受けて邦人や関係外国人退避に派遣の自衛隊機がわずか1人だけを退避というニュースは、これまた「どうして」と感じさせられる。当事者だったらメディアに何を期待するか。「取材

の記者やディレクターの顔の見えるニュース、我が事としてのレポートが見たい」。2021年夏のテレビメディアへの思いだ。

「風立ちぬ」

「新型コロナ」からの生還

千葉 邦彦

“新型コロナ”に感染し、生還を果たしたことで、この夏は記憶に残るものとなった。古希を迎えた2日後の8月6日、体調が低下し、PCR検査を受けた。24時間後に陽性の連絡があり、保健所の管理下に置かれることになった。息子、家内、家内の母も相次いで陽性と判明し、自宅、ホテル、病院に分散しての療養に入った。

話は今年4月10日に遡る。千代田放送会館での理事選考委員会の終了間際、今野会長が笑顔でこう発言された。「今どき集まって会議しようなんてのは放送人の会だけだよ。他は皆オンラインだ」。本当にその通りで、私の所属する学会や団体の殆どが理事会や総会をオンライン方式に変更して、既に1年が経っていた(※注を参照)。会長発言を「指示」と受け止めたという訳ではないが、同じ週の税理士打合せを最後に、私は千代田に向向くのを控えることにした。それだけではない。妻家の叔母の見守り以外、全ての外出予定を白紙にした。それぐらい気をつけていたのに、感染したのである。

症状はそれまでに経験したことのないものであった。悪い薬を注射されて地の底に投げ込まれている、あるいは、得体の知れない何か体がに入り込んで私を支配しているかのようだった。治療薬はない。往診も望めない。39

度6分まで上がった熱を解熱剤で下げ、咳や悪寒を和らげる薬を自己判断で服用するしか手立てがない。食欲は失せ、内臓に痛みが走る。私は心臓に所見があり、そちらへの影響も心配だった。保健所は繁忙を極め、毎日の電話聞き取りは2日置きになった。具体的に何かしてくれることは期待できない。外界から遮断されていると、「もう、このまま誰にも会えないのではないか」と悲観的になっていく……

など、3週間に及んだ闘病の詳しい記録が皆様の参考になるようなら、いずれ公表したい。さて、闘病中、朝日新聞の記事に激しく賛同し、NHKの番組に随分と慰められた。

「家族と暮らす人は『家庭内で防ぎようがない』と天を仰ぎ、単身者は『一人で重症化したら』と怯える。コロナ禍の一年半で、私たちは最大の危機に直面する。明日はわが身。この言葉がかつてなく切実に響く夏となった」(天声人語 8月13日)。

『自宅療養』とは、一般的には症状が安定した時に病院から出て自宅でゆっくり静養する、という意味でしょう。今回は入院の選択肢が奪われており、自宅療養とは言えないはず。『入院できません』という一種のトリアージ(治療順位の選別)で、『入院拒否』とか『入院謝絶』、あるいは別の言い方をすべきです(中島岳志(東京工業大学教授)「実は入院拒否 言葉の破壊」、8月24日「耕論」新型コロナ 迫られる「自宅療養」)。その通りだ。

NHKは軽井沢関連番組の再放送。新日本風土記「軽井沢」(7月29日BSプレミアム)、美の壺 スペシャル「日本の避暑地」(8月11日BSプレミアム)、プラタモリ セレクション「軽井沢」軽井沢はなぜ日本一の避暑地になった!?(8月17日総合)など。例年の夏は軽井沢に短い滞在をしている私。今年は行かないが、島津亜矢の名唱による『風立ちぬ』(作詞・松本隆、作曲・大瀧詠一)に促されて、「さあ、元気になって、また軽井沢に行かねば!」と思うのであった。

※注… その後、今年6月の法改正で、株主総会は「完全オンライン方式」で開催できるようになった。接触感染、飛沫感染に加えて空気感染の危険性が指摘されるなか、オンライン方式を軸に考えるべきだろう。また、招集方式とオンライン方式の併用のようなことも可能か、専門家の指導を仰ぐとよい。社会的な区分けという高齢者が大多数である会員の命を守ることが何より大切である。「新型コロナ」からの生還者として強く思う次第である。

この夏の浪曲、講談

塚本 茂

この夏は、浪曲、講談といった日本の伝統的話芸に触れる機会が多かった。キツカケは、講談界では神田伯山、浪曲界では玉川太福、玉川奈々福といった中堅若手のスターが登場し、人気を博していることから、それらの面々を生で観に行く機会が増えたことからであった。神田伯山の公演のチケットなどは、発売と同時に売り切れという人気ぶりだ。上野広小路亭、お江戸日本橋亭、講談新宿亭など、講談の定席が開催される会場は、50人も観客が入れば満席になってしまうほどの小規模な小屋だが、神田伯山が出演するとなると、当日売りの整理券を求めて長蛇の列ができる。

一方、浪曲界に眼を転じれば、玉川太福、玉川奈々福の二人が人気の浪曲師で、それぞれ新作の浪曲に取り組み、新たな風を吹き込んでいる。玉川太福は、「映画、男はつらいよ」の全作品の浪曲化を手掛け、玉川奈々福も「映

画 しこふんじやった」を浪曲に作り変える
など意欲的である。

浪曲と言えは「清水次郎長伝」、講談と言え
ば「赤穂義士伝」といった定番の作品は誰もが
知るところだが、どちらのジャンルにも、従来の
の古典芸能という枠組みを少しでも変えよう
という息吹が芽生えている。落語人気は定着
して久しいが、それに追いつこうとする熱を
感じることが出来る。

かつて、尾崎秀樹は「話芸は庶民の武器であ
る」と述べたという。笑いでモヤモヤした気分
をスッキリさせたり、留飲を下げたりといっ
たことは、確かに経験することではある。最近
の浪曲や講談にも、庶民の武器としての話芸
の力を感じる。客席にも、年配者だけではなく、
若い世代の姿が増えつつある。こころしばらく
は、浪曲や講談の世界から眼が離せない。

コロナ禍の最中のドラマ撮影

凜りんたろう

コロナ禍が切実感を増した昨年3月、東映
京都撮影所では「大岡越前スぺシャル」の撮影
準備に入っていた。

ロケハンと衣裳合わせが進行し、愈々1週間
後にクランクインを控えた4月7日、初の
「緊急事態宣言」が発出され、撮影所全体の作
業が、一切中止となった。

すでに撮影の始まっていた組もあつた事を思
えば、撮入前であつた我が組は、せめても幸運
であつたと言える。

ただし、出演者のスケジュール調整が振り
出しに戻り、撮影の再開は、何と5カ月後の9
月と決まった。

結局その間5カ月、一切の仕事が無くなり、
塾居同然の日々をおくる事となった。

9月、再結集。東映京都では、以前とは比
べものにならない程の感染防止体制が引かれ
ていた。入所時の検温と手指消毒は当たり前
として、スタッフルームは、以前の3倍はある
広い部屋に移り、換気と三密の防止、マスクの
徹底、朝夕の検温結果の記入と報告、そして撮
影現場での俳優諸氏のマスク、フェイスシー
ルド着用の徹底。もとより時代劇ゆえ、現代劇
に増して、マスクやフェイスシールドは着用
が困難である。特に今回、吉原の花魁が中心と
なる設定である事から、メイク・髪を気遣いな
がらのそれら着用は、難儀を極めた。まだ残暑
の厳しい京都のこと、俳優陣のストレスは察
するに余りあつた。

しかしながら、2週間の撮影期間中、コロナ
感染は起こらず、無事撮り出来た事は、幸運で
あつたと言わねばならないだろう。

その後筆者は、今年、年明け早々、東映大泉撮
影所に於いて、特集ドラマ「裕さんの女房」の
撮影に入ったが、やはり同様の制約の中、無事
撮影を終える事が出来た。どこの現場でも言
える事だが、当然、撮りの喜びを分かち合う
「打ち上げ」は一切なし。これまで単なるセレ
モニーと思つていた「打ち上げ」だが、こんな
にも侘しく、味気ないものかを改めて思い知
る。言わばアナログの極致のドラマ撮影と、テ
レワーク等、人を隔絶するコロナ対策とが、真
つ向から相容れないものである事を痛感させ
られる日々であつた。

「地デジ化」から十年

長井展光

「コロナ禍」、「五輪」。この2大テーマが大
きく扱われる中で、2021年7月24日をひ
つそりと迎えた。

黄色い鹿の「地デジカ」と各局アナウンサー
の「大使」が「テレビの買い替えを！」とアピ
ールした2011年7月24日のアナログ放
送終了・地デジ移行（震災の被災地東北3県は
翌年3月末まで延期）から十年。「大使」のお
一人は選挙に出られ、「五輪担当大臣」をされ
ているのだから、十年の歳月を感じる。

「テレビ離れ」と言われながら、この十年、
民放テレビ局は1社も潰れることなく走って
きた（民放連加盟社のF M局は2局姿を消し
たが…）。もともと「地デジ化」によつて、テ
レビは「伝送路」のハード部分は「デジタル化」
されたが、番組や編成、営業といったソフト面
は「アナログ」発想のままだったかもしれない。
世の中全体のデジタル化が進み、スマホが情
報ライフの中心となり、動画配信が一般化、さ
らにコロナ禍でデジタル化が加速、とメデイ
ア環境は一変した。伝送路はアナログのまま
残つたがラジコでデジタル社会の中にこぎ出
したラジオの方が先行している感もある。

次の十年、放送はどう変化するだろう？
ビジネス面ではデジタルの時流に追い付き、
ネットの中で展開していくことは必須だろう。
一方、番組作り・報道という面ではこれまで培
った信頼・ノウハウを大切に、地域に根付い
て、というアナログチックな面も大切にしてい
くべきではないか、そんなことを考える元
地デジ化担当者の7月24日でありました。

断捨離

中尾幸男

コロナ禍は相変わらず猛威をふるつており
ますが、基礎疾患持ちの身としては、外出もま
まならずもっぱら家に引き籠り状態にありま
す。お陰で時間はたつぷりあり、さてどうした

ものか？数年前に同窓の先輩から「人生最後
は何も残さない方がよいよ！」言われたこと
を思い出し、思い切つて断捨離に挑戦するこ
とにした。

元来、何でもとっておきたい性分で、本から
始まつて、ビデオ、名刺、年賀状、写真、仕事
の資料・書類・企画書・台本等にキリがない。
本はかねてより何回も古本に出したが、ビデ
オはどこも引き取り手もなく、やつと一か所
見つけて処分した。台本と仕事関係の本は仲
間の脚本家と会社の若手のプロデューサーが
引き取ってくれた。50年保管してあつた名
刺は約2万枚、鬼籍に入った人も多い。思えば
随分いろいろな人とお付き合ひし、お世話に
なつたものだとか感謝している。それでも
もまだ半分近くは残っているが、悩ましいの
は年賀状で、特に家族の写真のものはどうし
たものか？名刺と年賀状はそのまま処分とい
うのははばかれて、出会いに感謝しながらも
一応一枚ずつシュレッダーにかけた。

斎藤明美さんの著書「最後の日本人」に、
かの大女優高峰秀子さんは50年の女優生活
で溜まつた膨大な台本とスチールを財団に寄
付し、ご主人と合せて150本もあつた映画
賞のトロフィーすら捨てたという。何が人生
の理想か？高峰さんの理想は「煙のようにな
つて消えること、後に何も残さぬこと」だとい
う。

ところで、「断捨離」なる言葉、昔の広辞
苑には載っていない。何時から誰が考えたの
か？「断」は断つ、「捨」は捨てる、「離」は離
れる、個人的には馴染めない言葉である。これ
に「不」を付けてみると「不断不捨不離」何や
ら般若心経めくが、未だ道半ば、全く悟りの境
地には程遠いものがあります。（テレパック）

コロナ禍のなかで

林 健嗣

「生きづらさ」は既に限度を超えている。
昨年、札幌は「雪まつり」の中国観光客とその人流から感染が広がった。それから2年感染の波頭に北海道はある。地方からの視点で見ると、現場から遠い中央政治が地方を混乱させている。「エッセンシャルワーク」への敬意とともにエシカルワーク（倫理的に正しい仕事）という言葉を使う地方官吏たちがいるのを存知だろうか。地方は淡々と現実と闘っている。数字にはない「生活の息づかい」に敏感でない人たちに「いのち」を預けられるわけにはいかない。

さて、若い人に広がる「諦め」は老いた心を責め立てる。ギグエコノミーの担い手として、重宝されてきた隠れ貧困層をコロナは露呈させた。金がないから時間がない、時間がないから支援へのアクセスができない。孤立はそれを加速させ、さらに「諦めの温床」になる。

3年前から、女性問題を取り上げる共同制作を韓国と続けている。シングルマザーの「生きづらさ」に焦点をあて問題を共有し、放送を実現している。アジアは弱者と地方に冷酷だ。

経済格差を広げるギグエコノミーのアプリが皮肉にも「孤独を救ってくれる」という。放送にはいま何ができるだろうか。伝えるだけの時代は終わったとコロナが教えてくれている。

現場からまだ離れるわけにはいかない。

連載コラム「潮流」

古川重樹

『映像と文字』その情報伝達量の違いに戸惑ったこの1年だった。

昨年の夏、鳥取県内を地盤とする地元紙（日本海新聞）の編集局長から依頼があった。

「貴方が長年に渡って制作し続けているドキュメンタリーの魅力をシリーズで掲載したい。」それは「潮流」というタイトルのコラム欄に1年間（毎月1回で10000字余り）掲載するもので、メンバーは地元の大学教授や芸術家など執筆者は12名だった。

一瞬、返答に迷った。それは、私がこれまでに原稿を依頼されたのは民間放送連盟やメディア関係の情報誌が主だったからだ。でも、読者（視聴者でもある）へ番組制作者の気持ちを直接伝えるこの機会を「チャンス」と捉えることにした。「放送文化」としてのテレビの役割・意義を再認識して欲しいと考えたからだ。昨年8月にスタートした12回シリーズの私のコラムはこの7月で終了した

鳥取市に本社がある日本海テレビ放送出身の私は、6年前に米子市の中海テレビ放送（CATV）から招かれ、ニュースや番組制作の指導をしながら自らドキュメンタリー制作にも当たっている。

鳥取・島根両県にまたがる中海の水質改善をテーマとした作品「中海物語」が、幸運にも昨年7月に第57回ギャラクシー賞報道活動部門大賞を受賞し、ケーブルテレビ界初の大賞として全国的な話題になった。19年間で230本（30分番組）に及ぶ地道な報道活動番組が評価されたのだった。

地域メディアに必要なのは、そこで暮らす人々の心や声を大切にしながら、地域課題に目を向け、解決まで継続的に取り組む報道姿勢にあり、市民との「協働性」が新しい地域ジャーナリズムだと考えたからだ。

「潮流」では、この中海物語の作品を初め、日本とロシアを舞台に戦争による悲劇と国境を超えた「無私の愛」を描いた「クラウディアからの手紙」（制作…日本海テレビ放送）など数本の作品を取り上げ、制作過程での数々の体験について、「映像」をイメージしやすい文字表現で伝えることに心がけた。しかし、限られた字数の紙面で映像が訴える「ワンカットの意味」を文字で伝える難しさ、いや「映像の持つパワー」を改めて実感した1年だった。

（中海テレビ放送 特別顧問）

コロナの後

前川英樹

コロナの後、ポストコロナのことを上手く考えられない。

これまでの日常はもう戻らない。では、別の日常はありうるか。日々、無為に時間が過ぎて行くのが悔しい。私の時間はもうそれほど多くない。出来ることは限られている。

こう思ったことがある。

「テレビは何をしてきたか」ではなく「テレビは何をしてこなかったか」を考えるべきだ。と、いま、それをこう置き換えよう。私が何をしてきたかを振り返るのではなく、私は何をしてこなかったのかを見つめよう。

そこにはあり得たかもしれないもう一つの可能性があり、そこにもう一人の私がいる。

「私たちが選択した『現在』は、選ばれなかった無数の可能性と等価であり、したたがって異なった選択をした人々の『現在』とも等価である。」（メディア論ノート2021）前川「高度情報化社会のガバナンス」坂井利之・東倉洋一・林敏彦編著 2023 NT出版 所収）

傑作「日本アパッチ族」の「まえがき」に小松左京はこう書き記している。

「同時にそれは、この小奇麗に整理された今日の廃墟の姿ではなく、廃墟自身のもう一つの未来、もう一つの可能性なのかもしれない。」この荒唐無稽な、架空の物語は、私の中になお頑強に行きつづけている『戦後』なのである。（1964年 カッパノベルズ）

「もう一つの未来、もう一つの可能性」は作家の仕事に限らない。それは私たちの想像力の問題である。人との連帯や共生は、その想像力から生まれる。

21世紀は9・11と3・11とコロナの時代として記録されるに違いない。コロナ禍は、おそらく人間の歴史の大きな転換点として語られるだろう。

残りの時間をそのような時代とともに生きるとしたら、私たちは何をしてこなかったのか、その意味を繰り返し考えてみたい。

「太平洋戦争の敗北でも折れなかった『なにか』戦後には別の形をとって発展を遂げていった『なにか』が、今度はポキッとじて、そこからさてどちらの方向へ芽が出ていくんだろうかというまことに重要な分岐点に今、来ているんだと思います」中沢新一

「何か」とはこの国の近代の過程である。

「人類の歴史が教えてくれるのは、安全で豊かな社会に暮らせることは例外的幸運であって、人類史のほとんどの時期をほくたちは窮乏と危険をヘースにして、それに対処するように人間は能力開発プログラムを作り出してきた。そして、その能力の開発を怠った人々、『目に見え、耳に聞こえるもの以外のものは存在しない』と豪語した人間たちにどのような罰が下ることになったの

か、それは神話時代から現代のホラー映画に至るまで、人間たちは語って倦まなかった。せめてその事実については『合理主義者』たちにも同意してほしいと思います。」内田樹（『大津波と原発』（内田樹×中沢新一×平川克美 2011.5 朝日新聞出版）

の補助をいただき、11月にRKKラジオ（熊本放送）で放送することになりました。タイトルは「水俣三中 還暦同窓会」。12年前に閉校した私の母校水俣第三中学校の卒業生が還暦の年に、学年単位で同窓会を開くという実話をもとにした物語です。フィクションではありますが、登場人物には私が「水俣」の取材で出会った人たちの人生を投影しました。

3・11の直後に語られたこれらの言葉はいまコロナ禍にあつて再び語られても不思議はない。

私にとつては「60年目の告白」「おじいちゃん炭坑節」に続く3作目のラジオドラマです。今、脚本の執筆中ですが、それにしてもラジオは難しい。

だから一取り敢えず、読まなかった本、読み返したい本、もう一度観たいままになってしまった映画、行く機会を失ったままの展覧展示、など。そして、訪れてみたい場所。遠くなくていい、例えばどこか関東地方の忘れられたような町でいい。そんな風に時間を過ごしたい。それは回顧ではなく確認であり発見だと私は思う。

もう一つの目標は12月のコンサートで、念願の曲、ヴェルディのオペラ『仮面舞踏会』のアリア「おまえこそ心を汚すもの」を歌うことです。私の声域バリトンにとつては高音が続く難曲ですが、これまでの「ためらい」と決別して「挑戦モード」に切り替えました。人生初のオーケストラによる伴奏で、会場は県立劇場コンサートホールです。精一杯背伸びして歌います。

あり得たかもしれない〈私〉、ワタシ。80歳。結構な時間が過ぎてしまった。

2つの目標は「待つていても新たなものは見いだせない」という私の制作者としての原点に回帰させてくれます。コロナ禍がもたらした自粛に対する反動なのかもしれません。

取り返すことはできないし、それはそれでいい。

ただ、残りの時間はそのように過ごしたい。コロナが私から奪ったものを確かめるために。

コロナ禍に見いだした2つの目標

村上雅通

非常勤講師を務める大学の春学期が「対面」[Web]「対面」と目まぐるしく変わったり、テレビの取材が長期間中断したり、新型コロナに対応する術を暗中模索する日々が続いています。まだまだ不透明な日常は続くでしょうが、この秋、2つの明確な目標ができました。1つ目はラジオドラマの制作です。ローカル民放AMラジオの団体「火曜会」から制作費

Go to Travel」しかり。ワクチン接種の告知はアクセス不能の実態をさらけ出した。例を挙げるに暇がない。これらは事前に予測可能なことで、事態の読みがアマイとしか言いよ

うがなく、様々な混乱をきたしてきた。その原因は、たびたび指摘されるように、欧米に比べて日本人の表現力に事態を読む「想像力」が不足していることにあるのではないかと思う。

もやつてるよくだから、いいの？」
「夕行をTで表すテロップ」↓「これもまた、NHKも」
「タブレット授業でも当たり前になるって？」
「おいしい、デスクの電話はすぐとること」↓「強要することはパワハラです」
（固定電話の環境がない若手にとつて、知らない相手の電話を取ることはブレッシャーなんです。電話の取り方という新人教育はいまや常識じゃないとか…）

19世紀後半、フロイトが科学者としての精神分析から「無意識」や「夢」に行き着いたが、芸術家たちは視覚的想像を、外部を再現する伝統的絵画から人間の「内部の表現」に転じ、事物を外側から見るのではなく、事物が人間の内部に引き起こす不条理な反応（不安や恐怖、反発、逆に愉悅などを表現する方法論を提起した。クリムト、ゴッホ、デ・キリコ等々で、キュビズムのピカソに続く。この大きな構造転換の基にあるのは言わずと知れた「想像力」だ。

「この企画書の人物、喋りはどう？」↓「ネットのデータなので…分かりません」
そんなこんなの仕事場で2、3世代と一緒にものつくりをしているのにか80歳の大台、旅番組「遠くへ行きたい」の放送開始4年後からP、CP、GPとして関わって、番組は51年目を迎えることになった。鉄道少年が昂じて旅好きになり、それが仕事になるとは、幸せな人生、贅沢としか言いようがない。

それほどに大げさでは無いかもしれないが、身辺に起きる様々な問題に対して、どれだけ想像力を働かせて関わられるのか試されているように思った。

一方の昨今、「コロナ禍対応のなか、東京2020開催に疑問を呈しながら、始まってみれば東京2020もコロナにも国民の関心事には適切に対応しています」という雰囲気報道ばかりで、同窓会の連中からは「マスコミの責任はどうなってるの？」に対して小生の解説コメントも歯切れが悪い。

近況で締めくくろうと思ったが、またまた「こりや、ダメだ！？」続出

こりや、ダメだ！？

村田亨

「適切に対応してまいります」↓「具体的に？」
「独自のスクープ」↓「投稿動画が元の追加取材」
「新聞が手離せない」↓「ニュースとワイドショー」
「午後の記者会見の垂れ流し」↓「1時間は埋めて、翌日もネタに使っちゃう」
「…だそう」のナレーション続出↓「NHK

「政局に持ち込んで」↓「前代未聞のちやぶ台返し、自民党ニコニコ、野党は渋顔」
「（命のビザ）、という言葉はどこに行つたのか？」↓「大使館の新人教育は？」
「なぜ、大使館員が早々と避難」↓「テレビの好きな独自取材は進んでいるの？」
「近況を」という原稿依頼に思い付くのは「こりや、ダメだ！？」の独り言ばかり、ステイホームの今日この頃、原稿もひとまずこの

辺で・・・。

アフターコロナの始まりを予感する

渡辺純史

コロナ禍2年目の夏は、私にとっても格別な夏となった。

昨年の会報に「コロナ禍の中の世迷言」を書いた。コロナ禍の中、政治が政変劇を演じるだけで機能せず、その政局をSNSが煽り続ける「狂騒の夏」を嘆いたが、今年の夏も政治は、コロナもオリンピックもすべて政局に繋げるだけで、依然として有効なコロナ対策を打てないまま、結果として、二年続けての政権投げ出しとなった。あたかも昨年のまま、時が止まっているように見える。

が、そうだろうか。今年は昨年と違って、多くの国民がこれまで以上に「共生」と「いのち」について考える時間を持った。様々な差別偏見を乗り越え集まった世界中のアスリートたちによるパラリンピックと、国民の「いのち」を守ると言いながら、何一つ守ろうとしない現実の政治を同時体験させられる中で、必然的な結果であろう。私の場合、個人的事情も重なり、とりわけそうであった。

私事だが、4月、放送人グランプリの選考やNHKの経営計画を巡る議論を始めた頃、腹部に異常が見つかり、切除手術のため、5月中旬からひと月余り、地方の総合病院に入院した。7月末、懸案であった「贈賞式」は、無観客方式ではあったが、多くの会員の協力を得て実施することができた。だが6月、今度は私の療養の面倒を見てくれていた親族が突然体調を崩し、私の通院する同じ病院に入院した。

恢復しつつある私が、今度は面倒を見る番だと軽口をたたきながら、9月になっても病院通いを続けている。私の周囲は体の不自由な老人ばかり、所謂「老々介護」だ。2500病床、職員数2200人、来院患者数も一日3000人を下らないこの大病院は、コロナに係らず終日混雑し、診察ともなると一日がかりである。心・体の不安や不自由さを持つ患者たちとその命を守ろうと働く医師や看護師等の共同集団行動を、病院通いで見慣れると、盲目のパラアスリートに寄り添って走る伴走ランナーや、車いすを修理、調整して動き回るスタッフなどの懸命な姿をパラリンピックのテレビ中継で見ると、に、「共生」という言葉の内実を実感できる。昨年、政権を擁護する立場から政局を煽って見せたSNSが、かつての週刊文春のように、社会の監視役として、オリンピック組織委員会会長、開会式担当責任者のパワハラ、セクハラ、いじめ、ジェンダー差別など、強者が弱者を圧迫する行為を糾弾暴露することで、その人事に決定的な影響力を及ぼし、結果として、オリンピック・パラリンピックの理念である「共生」というテーマを国民の前に強く印象づけたのも、コロナ禍の中ならではのものだ。

もう一つ、「いのち」についてである。例年、夏は戦争関連番組が集中して放送され、戦争と「いのち」の問題を否応なく考えることとなるが、今年はオリンピック番組編成により再放送が多く、量的には物足りなかったものの、2年目となるコロナ禍を意識した秀れた作品があった。二つ番組を挙げる。一つは、NHKスペシャル「開戦 太平洋戦争」日中英 知られざる攻防」(8月15日)である。蒋介石の日記を読み解きながら、国際政治を意識して用意周到な戦略を練る中国に対し、日本の軍部政治が場当たり的無策に

よって、無謀な戦争に突入していく様を丹念に描いた。「協力」として、東大の加藤陽子氏がエンドタイトルにクレジットされた。彼女の名著「それでも、日本人は戦争を選んだ」は、以前読んでいたが、こうして改めて番組をみると、コロナ対策の遅れが戦争時の日本の場合当たりの無策ふりと変わらぬことを改めて感じさせ、実にタイムリーな企画であった。蛇足であるが、加藤氏は、昨年菅首相から日本学術会議会員任命を拒否された学者のうちのお一人である。

もう一つは、NHKBS1スペシャル「感染症に斃れた日本軍兵士」(8月22日)だ。前後編合わせて1時間40分になる長尺のドキュメンタリーで、前編は「マラリア 知られざる日米の攻防」、後編は「破傷風 ワクチン開発の闘い」。日本軍の餓死や戦病死は戦没者の6割にも達したとも言われているが、この番組は、満州事変以降の旧日本軍が、戦地の感染症であったマラリア、破傷風、 Deng 熱等の特效薬やワクチン開発、そして細菌兵器開発のために、戦地の捕虜や占領地の一般労働者まで巻き込んで人体実験を繰り返し、大量の死者を出したうえに、現地医師にその責任を負わせ、死刑として処理してしまった冤罪事件などの知られざる事実を、多数の新しい映像資料や100歳を超えるようとする証言者の証言等によって丹念に洗い出したドキュメンタリーである。

戦争というものが、相手に勝つという目的のためには、戦闘行為に殺し合い以上に残酷なやりかたで、「いのち」を思うままにすることができ、犠牲になったのは、中国人捕虜「マルタ」(丸太)、インドネシアの現地労働者「ロウムシャ」(労働者)で、そう聞くだけで身の毛のよだつ事実である。コロナ感染症を、戦時中に重ね合わせに描いたこの

作品は、感染の急激な拡大の中で、コロナ難民が続出し、患者をトリアージ(「命の選別」)するような、今の時代にあつて、改めて、人のいのちには大小軽重はなく、弱者(「貧者、女性幼少児、障害者、被差別者」)が、国家、権力、強者(「富裕者、差別者」)により、序列化され、いのちが処理されることがあつてはならないと、視聴者に強く訴えている。ディレクターは、今年の「放送人グランプリ大賞」を受賞された金本麻理子さん。昨年、コロナ禍の中東に取材したNHKスペシャル「世界は私たちを忘れた」追いつめられるシリア難民」BS1スペシャル「レバノンからのSOS」コロナ禍 追いつめられるシリア難民」の連作に引き続いての労作である。余談だが、7月31日の贈賞式で、制作を担当するNHKの塩田純氏や東野真氏共々、「これから帰って編集です」と、疲れた顔をしながらも、どこか嬉しげに語っていた姿を思い出す。私たちからの贈賞を裏切らず、素晴らしい作品を続々と世に問い続ける、彼女の並外れたパワーに驚嘆する。と同時に、改めて、今年の贈賞式を実施してよかったと思う次第である。

コロナ禍の2年目の夏、コロナに立ち向かうべき政治は立ちすくんだまま、なすすべもないが、国民の側には、僅かながらでも変化の兆しが見える。強き者へ向けての異議申し立てに鋭さが増している。冒頭、今年も政権投げ出しがあったと書いたが、菅政権の退場は、投げ出しではなく、長らく続いた安倍一強政治(強きものをより強く、弱きもの、従うものに限り、おこぼれを拾って強くなる「トリクルダウン政治」)への国民の側からの異議申し立ての結果だと思いたい。

コロナ感染症の行く末はまだよく分からないが、アフターコロナの時代のありようが少

しずつ見えてきたように感じる。今年の夏、私は、自身の体の補強工事を済ませた。「共生」と「公平ないのち」に向けたこれからの時代を、もう暫くウオッチングしていくつもりだ。

ラジオのページ

我が青春の「ラジオデイズ」

田中秋夫

♪ ぼくは一人座り ラジオの灯を見ている

十代の教え切れない夜

たつた一人の親友だつた

大事なことはみんな 君に教わった

大切な ぼくのラジオ

君の時代だつた 君そが支配したつた

(クイン「Radio Ga Ga」より)

ウディアレン監督・脚本による1987年の映画作品に「ラジオデイズ」がある。

監督自身の少年時代を描いたと言われるこの映画は第2次世界大戦開始直後、1940年頃のニューヨーク・クイーンズ区が舞台で、主人公の少年の目を通してユダヤ人の移民家族が描かれている。少年は毎日ラジオから流れてくるトミー・ドーシー、アーティ・シヨー、グリーンミラー等名曲の数々に聞き入っていた。この映画は家族団らんを中心にラジオがある懐かしい時代を描いた傑作だった。

時代背景は多少違ふが、この映画と同じように私自身の子供の頃もラジオが家族団らんの中心にあった。戦後から1950年代前半までの庶民生活は物資が不足した貧しい時代であり、人々にとってラジオの番組は日常生活で唯一の楽しみだった。

当時はまだ民間放送ラジオが発足する前、NHKラジオでドラマ「鐘の鳴る丘」、クイズ

番組の「二十の扉」や「とんち教室」、三木鶏郎グループの社会風刺番組「日曜娯楽版」などを聞いていた記憶がある。当時は真空管ラジオの時代で家族が集まる居間にそのラジオは置かれていた。ダイアルの主導権は兄が持つていて、兄が聞いていた番組を聞いていたわけだが、特に演芸番組の「ラジオ寄席」で演じられる落語の人情話や郭話などを面白く聞いていた記憶がある。特に古今亭志ん生が好みだった。今振り返ると、かなり耳年増の子供だったように思う。

民間放送のラジオ局が誕生したのは小学生の頃で、関東地区では1951年12月のTBSラジオを始めて、翌年の文化放送、さらに1954年のニッポン放送、1958年のラジオ関東など次々と開局していった。

この頃の番組で記憶に残っているのはニッポン放送で放送された江戸川乱歩原作のドラマ「少年探偵団」やTBSラジオで放送された武内つなよし・福井英一の漫画が原作となつたドラマ「赤胴鈴の助」である。この「赤胴鈴の助」に吉永小百合が出演していたことはずっと後に知ることになった。

その後、中学、高校は地元中学校に入学したが、その高校は歴史ある伝統校であり、「質実剛健」をモットーとする保守的な気風の高校だった。私はそんな高校生活に馴染めない日々を過ごしていたが、唯一そんな私を癒してくれたのがラジオだった。

夜になると勉強机に向かいながらソニーのトランジスタラジオにイヤホンを付けて、ラジオ各局のデイスクジョッキー番組に次々とダイヤルを合わせていた。音楽番組、特にアメリカンポップスが大好きだった。ラジオ各局にはそれぞれ最新のヒット曲をいち早く紹介する番組があった。文化放送には帆足まり子さんの「S盤アワー」、TBSラジオには園

いさんの「L盤アワー」が人気番組で、「S盤アワー」はビクターレコードの提供でペレスブラードの「エルマンボ」を番組のテーマ曲に使っていた。また「L盤アワー」はCBSコロムビアの提供でパーシーフェイスオーケストラの「恋をして」をテーマにしていたと思う。両番組ともそれぞれのレコード会社の音源をいち早く紹介していた。ハリーベラフオンテの「バナボートソング」、ジョニー・レイの「雨に歩けば」、マーティロビンソンの「ホワイト・スポーツコート」等これらのメロディーは今も鮮明に記憶に残っている。

映画にも興味があった私はNHKラジオで関光夫さんの「映画音楽の時間」や文化放送の茂木幹弘さん、田中まり子さんの「ユア・ヒットパレード」も良く聞いていた。

この番組では当時の映画音楽は必ずヒット曲チャートの上位にランキングされていた。年間チャートの1位になった洋画のテーマ曲は1955年には「旅情」、1956年から3年間連続で「エデンの東」、1959年「大いなる西部」、1960年「太陽がいつばい」、1961年「栄光への脱出」、1962年「シエラ」その後も「ロシアより愛をこめて」「サウンド・オブ・サイレンス」「青春の光と影」等が続いた。特に私にとって印象深い曲は「エデンの東」のテーマ曲だった。エリアカザン監督、ジェームスディーン主演のこの映画を見たのは高校2年の頃だった。愛を求めても得られない厳格な父親との葛藤を描いたこの作品が当時の私には自分の家庭環境とオーバーラップするように見え、たちまちジェームスディーンの大ファンになった。

またTBSラジオが日曜日に放送していた志摩タ起夫さん、浦川麗子さんのコンビによる「ポピンミュージックレター」も愛聴番組で毎週のように聴いていた。

そんな青春時代を過ごした自分がその後「ラジオ屋稼業」になり、若者向けのPOPS番組の担当ディレクターになるなんて思ってもいなかったのだが、冒頭に引用したクイーンの名曲「ラジオ・ガ・ガ」を聴くと一瞬にしてあの時代に戻れるような気になるのだ。そして、後期高齢者になった今、作詞・作曲のロジャー・テイラーがこの曲に込めたラジオへの愛のメッセージに深く共感している。

♪ だから聞き流される雑音なんかにならないで 子供たちの RMなんてならないで 僕らが耳にするのは 意味のないラジオノイズ グルー・ガ・ガ 鳴っている

ラジオよ また君を愛している人がいるよ そんな君の時代は まだこれからなんだ ラジオよ

(放送人の会理事)

ラジオから生まれた新しい形

首相会員の YouTube 実況

木原 毅

法政大学の上西充子教授が、政府首脳や官僚たちの答弁を「飯論法」と命名したのは実に言い得て妙だった。「朝飯食べた？」と問うと「食べてない」と答える。「朝食抜きたっただ」と思っているとどうやら「ハン」は食べべたらしいというもの。その論法の最たるものは例の「桜を観る会」についての当時の安部首相の答弁、地元支持者に対して参加者を募集した《募集はしていない》というもの。これには聞いた口が塞がらなかった。

この「飯論法」、菅政権に見事に引き継がれというが、ますますバージョンアップして磨きがかかっている。ちよつと前の話(今年の5月7日)になるが上西教授がTBSラジオの「アシタノカレッジ」(月々金22時〜23

時55分にゲスト出演したときのこと、パーソナリティの武田砂鉄に対し、菅首相の記者会見についてこんな趣旨の発言をしていた。

「NHKや民放の夜のニュース番組を観ていると、放送時間の制約のせいか巧く編集されていて、言い淀みもなく記者の質問にはそれなりに応えているような印象を受けてしまいがち。報道されたものだけ観ると視聴者は、どこがすれ違いなのか、どこで言質を与えないような対応をしているのか分からない。メディアは権力をウォッチする役割があるのだから、このような会見は全篇流したうえできちんと検証すべきではないか」というもの。

もちろん東京のテレビキー局各社はこれまでに自社のサイトなどを通じて首相会見を全篇ネット中継はしていたものの、いかんせん素材の電送とあまり変わらず手が加わっているわけではないので、誰がどんなシチュエーションで質問しているのかも分からない。一般人にはなかなか馴染めなかったのは否めなかった。

そんななかでこれに応えたのが、同じTBSラジオの夕方の番組『Yes!!』(月)金15時30分~17時50分である。放送時間外で『実況ライブ！菅首相の会見音声を聞く』と題した配信を行い始めた。YouTubeの公式チャンネルを使って会見の音声を流しながら、番組パーソナリティの荻上チキと南部広美、それにTBSラジオの国会担当・澤田大樹記者が加わって生で解説してゆくもの。澤田記者はあの森喜朗がJOC会長を辞任するきっかけとなった会見で一躍その名を知らしめ、毎週金曜日にレギュラー出演している前述の『アシタノカレッジ』では武田砂鉄がからかい半分に「森、バッハ、菅の天敵」と紹介している気鋭のジャーナリストである。

実況ライブは1回目は7月の8日。これが

好評だったようで、2回目が7月30日、3回目が8月17日と、緊急事態宣言が発出・延長される際に行われた会見に併せて配信された。1時間超からときには1時間半以上に及ぶものながら、3回目は当日に4万人以上が視聴したようだ。検索すればいまでも過去3回ぶんのアーカイブがTBSラジオのYouTube公式チャンネルに置かれているから興味のある方はぜひ。

最後に実況ライブの模様を説明しておきたい。YouTubeの画面にはラジオのスタジオがそのまま映し出されている。おそらくスタジオでは音声を聞きながら映像の配信も観ているだろう。いま質問したこの社は今月の幹事社、ここまでは事前に質問が首相側に届いているはず、この記者はいつも鋭い質問をする人などなど、澤田記者の現役ならではのビビッドな補足説明が入る。いっぽうの荻上は、「この質問には全く答えていないね、これでは国民に危機感のメッセージは伝わらないね、」など鋭い指摘を加えると共に総括してくれる。一種のオフ・チューブであり、旧くて新しいラジオ的「実況」なのである。こうしたチャレンジは放送の持つ多様性にあらためて気付かせてくれる。もつと試みられてもいいだろう。(放送人の会理事)

民放AMは、時代遅れか！

三原 治

不謹慎だが、新型コロナウイルスの影響で、ラジオの力が見直されている。「ラジオ復興」というのは大げさだが、ラジオを聴く時間は増えたという調査結果も出ている。ビデオリサーチの調べによると、首都圏民放5局の1分当たりの平均聴取人数は、2020年2月ごろから増加し、4月中旬には90万人となっている。3~4月にも、約85万人が定着している

という。ラジオの明るい兆しの原動力になっているのが、番組をインターネット配信するradio(ラジオ、東京都)である。設立から10年。民放全99局が参加し、月間利用者は約900万人で推移するまでに成長した。十代、二十代の若いリスナーも確実に増えている。

一方、民放ラジオ局の経営は、相変わらず苦しい。ラジオ広告費の低迷は続く。そんななかAM局の状況は後ろ向きである。

「ワイドFM対応端末普及を目指す連絡会」が、2021年6月15日に会見し、TBSラジオ、文化放送、ニッポン放送の在京民放AMラジオ3局は、2028年秋にFM局に転換し、AMを停波することを目指す」と発表した。在京以外の全国のAM44局のうち、北海道放送(HBC)、STVラジオ、ABS秋田放送の計3局を除く41局も、同時期をめどにFM局への転換か、FMを主体とする併用体制に移行する方針。

AMは高層ビルなどが多い都市部で電波が遮られる「都市型難聴」が問題となっていた。それに比べてFM波はビルなどの中へも届きやすく、設備などの運営コストも安い。そのため全国47局は、電波障害や災害対策として、AM放送と並行し、高い周波数を使ったFM補完放送(ワイドFM)を行ってきた。

しかし、現在のAM放送は老朽化した設備を更新する費用や土地の確保といった問題があり、継続が難しくなっている。また、FM設備の更新はAMに比べて安価なもの、AMとの二重コストは各局も大きな負担となり同時放送に伴う「二重の投資」は各局の経営を圧迫している。

ラジオ局の経営悪化を受けたAM停波をめぐっては、日本民間放送連盟が設備・運営コストの安いFMへの一本化に向けた制度改正を

要望。総務省は19年、ラジオ局のAM放送廃止とFM放送への転換を容認し、20年にはFM転換などに関する考え方を公表した。これに基づき、23年以降にAMを長期間停止する実証実験を行う計画となっていた。

総務省の実証実験には、47局のうち21局が参加する意向を示しているという。在京AM3社は「28年秋でのAM停波実現を目指す」、協力してさまざまな課題解決に努める(入江清彦・当時TBSラジオ会長)としている。これに対し、武田良太総務相は「聴取者の皆さんのご理解を得ながら進めていくことが最も重要だ」と指摘。AM停波実験を通じ、課題を検証していく考えを示した。

ここまでは、FM化に向けた状況である。これは、民放AM局の意向であり、放送局側の論理である。武田総務相の言葉にもあったように聴取者の意向は反映されていない。聴取者は、このままAMが停波されることを望んでいるだろうか。

もう一つ、総務省はAM停波で問題ないのだろうか。AMラジオ局の電波は、国外にも飛んでいくため、ITU(国際電気通信連合)において近隣各国との国際調整を行っている。国際登録されたラジオ放送局を廃止した場合、その周波数は、空きとなる。一度失った周波数の登録は国際的に非常に困難であると聞く。太平洋戦争で経験しているが、ラジオはプロパガンダ放送という武器にもなる。周波数という既得権益であることを忘れてはならない。AMの存在意義として、災害時などに地域に密着した情報を届けるインフラとしての役割を忘れてはいけない。そのために広告収入で成り立たなくなったビジネスモデルとしてのラジオでは現実的ではない。

ラジオは、もはや時代遅れのメディアなのか。Helloやポッドキャストによって、若者

の支持者は増えている。[radio]でいいじゃない」「FMでいいじゃないか」という声もある。それでも私は、「AMは、守るべきもの」と言い続ける。(放送人の会理事 日本大学芸術学部放送学科非常勤講師)

新人会員紹介

塩田 純(しおた じゅん) 60年6月生。

83年NHK入局。Nスペ「東京裁判への道」で放送文化基金賞本賞、同「日中戦争」で文化庁芸術祭大賞、同「日本国憲法 誕生」で文化庁芸術祭優秀賞、BSDキュメンタリー「お母さんに会いたい」でイタリア賞グラナロロ特別賞。「戦後史証言プロジェクト 日本人は何をめざしてきたのか」ギャラクシー特別賞。BS「スペシャル」父を捜して日系オランダ人終わらない戦後」で放送文化基金最優秀賞・ATP最優秀賞、同「レバノンからのSOS」コロナ禍 追いつめられるシリア難民」文化庁芸術祭優秀賞。個人としても、芸術選奨文部科学大臣賞、放送文化基金賞、放送人グランプリを受賞。現在はNHKエデュケーショナル コンテンツ制作開発センター 美術教養グループ 制作主幹

訃報

田原茂行 2021年6月3日没。享年91。

1954年TBS入社。58年録音構成(「学生事件の記録」で日本ジャーナリスト会議賞受賞。その後ラジオ、テレビ編成部、企画調査局長を経て86年東京タータビジョン社長。96年常磐大学人間科学部教授。94年放送批評懇談会理事、ギャラクシー賞選考委員。放送人の会には創立時からの会員で2002年の「田原茂行プロジェクト」と呼ばれた「全国」ぶだんの番組「フォーラム」を記憶する人が多い。地方局の番組制作への関心はTBSのテレビ編

成のとき以来で、地方局の自主制作番組の問題が放送人の会の活動方針の柱の一つとなつたのは田原氏の熱意が大きい。

編集後記

▼放送人グランプリの特集にあたり、受賞者の皆さま方のご協力、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

▼初夏、伊藤大先輩から広報委員長と編集長を代わろうと相談され、大先輩にはもう少しだけ編集長をお願いした。と言ったのも、我が寓居には卓上電話とFAXが無いからだ。そもそも、格好の置き場所すら無い。

この春、いつ感染症でボツクリ逝つても家族に迷惑かけぬように、始末をしておこうと「生前整理」を思い立つ。先ずは、無用なシロモノが収納場所に氾濫鎮座する、菅野家の悪癖を断つべしと、娘と孫の前で「今後は、捨ててから、買う!」と宣言してしまつたのだ。かくして、FAXの代わりに何を捨てるかで今、悩み抜いている。会報93号に備えて、秋深き頃には決めたい!

▼次号・93号の発行は11月中の予定です。

▼再放送のPRです。今から33年前、ソウル五輪の年の1988(昭和63)年後期、朝ドラ「純ちゃんの応援歌」(主演:山口智子、脚本:布勢博一、演出:佐藤幹夫ほか)が、9月27日(月)から、月々金・午後4時20分〜4時50分まで、1日2本ずつ放送されます。昭和63年から平成元年へ、年号を跨いだ「昭和最後の朝ドラ」を、どうぞご覧下さい。(菅野高至)

▼歩行がだんだん困難になり、かかりつけの医者に勧められて介護保険の認定を受けました。要支援2の認定になるようです。というわけで行動ままならず、今回の編集作業はほとんど菅野さんにお任せしました。菅野さんありがとうございます。事務局へ足遠くなりそうです。よろしく願います。(伊藤雅浩)

会員名簿

2021.9.10 現在

【あ】藍澤幸久 相田洋 相本芳彦 青木裕子 青山悌三 秋田和典 天野證範 雨宮望 新井和子 【い】池田正之 石井彰 石井ふく子 石田研一 石橋映里 石橋冠 石原信和 磯智明 板谷駿一 市岡康子 市川哲夫 市村元 伊藤博文 伊藤雅浩 井上佳子 今井義典 岩澤敏 岩瀬弥永子 【う】上村忠 浮田周男 臼杵敬子 【え】江川雄一 江口展之 遠藤利男 遠藤雅充 【お】大池雅光 大川光行 大沢悠里 太田昌宏 大類なぎさ 緒方陽一 岡野真紀子 岡室美奈子 岡本勉 小川治 小川和之 小河原正巳 沖野瞭 荻野慶人 尾田晶子 織田晃之祐 【か】加賀美幸子 柏木登 片岡敬司 加藤滋紀 加藤拓 加藤義人 金平茂紀 川平朝清 鎌内啓子 亀谷弘美 川喜田尚 川口健一 川渕恵子 河邑厚徳 【き】北川泰三 北川信 北出晃 北村美恵 北村充史 木下浩一 木原毅 木村成忠 【く】工藤英博 隈部紀生 倉内均 訓覇圭 黒崎博 黒沢淳 【こ】小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 後藤和晃 小山紳人 近藤邦勝 今野勉 【さ】斎藤秀夫 斎明寺以玖子 寒河江正 坂元良江 桜井元 佐々木彰 佐々木光政 佐藤敦 佐藤幹夫 佐藤理恵子 佐野有利 【し】塩田純 重延浩 重村一 重盛政史 静永純一 柴田陽一郎 清水誠 志村一隆 下崎寛 下重暁子 下村幸子 白井博 新山賢治 【す】菅野高至 菅野嘉則 杉田成道 鈴木俊樹 鈴木典之 鈴木弘貴 鈴木芳夫 鈴木嘉一 須磨章 【せ】清野豊 関佳史 せんぼんよしこ 【そ】曾根英二 【た】高島秀之 高田宏 竹中一夫 田澤正稔 多田健 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中典子 田中則広 【ち】千葉邦彦 【つ】塚原あゆ子 塚本茂 塚本幹夫 辻本昌平 土屋敏男 つボイノリオ 露木茂 鶴橋康夫 【と】東城祐司 戸田桂太 富沢一誠 豊原隆太郎 鳥谷規 【な】長井展光 中尾幸男 中込卓也 中崎清実 中島僚 中島由貴 永田浩三 永田俊和 永野敏一 中町綾子 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村美美子 中山和記 並木章 【に】新村もとを 西憲彦 西村与志木 仁藤雅夫 二宮文彦 【ぬ】沼田通嗣 【の】延江浩 信井文夫 【は】萩原豊 林健嗣 林宣昭 林安二 原田令嗣 【ひ】日笠昭彦 玄武岩 【ふ】深尾隆一 藤井チズ子 藤井正博 藤田知久 藤久ミネ 藤村忠寿 古川重樹 【へ】逸見京子 【ま】前川英樹 牧之瀬恵子 増山麗央 松尾羊一 黛りんたろう 丸山友美 【み】三上義智 水上毅 光原朋秀 三原治 三村景一 三村千鶴 宮崎洋 宮川鑑一 【む】村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】本木敦子 元田成 諸橋毅一 【や】八木康夫 矢島良彰 薮内広之 山鹿達也 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】吉澤保 吉田賢策 吉村豪介 吉村直樹 【わ】和崎信哉 渡辺浩平 渡辺紘史

【賛助会員】 日本民間放送連盟 TBSメディア総合研究所 融合研究所 日本ケーブルテレビ連盟